



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

全日畜ワークショップ（広島会場）

畜産経営の危機を克服し、持続発展のヒントを求めて

速報レポート

- ◎ 開催日 令和5年11月16日（木曜日）
- ◎ 時間 13：00（開会）から16：00（閉会）
- ◎ 会場 広島ガーデンパレス

令和6年1月

全 日 畜

（一般社団法人 全日本畜産経営者協会）

はじめに

私たち、畜種横断の畜産生産者の団体「全日畜」は、令和5年度から日本中央競馬会畜産振興事業の「畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査事業」を2カ年で実施しております。

この事業は、近年、畜産経営の継続が非常に困難な状況の中、直近ではパンデミック等による飼料をはじめとした生産資材の価格暴騰や入手困難、更にはSDGs対応など、畜産経営存続が危機的な状況であり、廃業に追い込まれる経営体も少なくないことから、今回の危機により受けた影響及び対応状況、政府施策の畜産経営者への貢献度等を調査するとともに、危機対応事例集等を作成・配布することで、畜産経営の継続に資することを目的とする事業です。

本書は、令和5年11月16日（木）に「畜産経営の危機を克服し、持続発展のヒントを求めて」をテーマとして実施した、全日畜ワークショップ（広島会場）の概要を整理した「速報レポート」です。今回は、経営危機の種類として自然災害（山陰水害）、効率の悪い施設、飼料や資機材の高騰などがあげられ、その対応策として、平時から危機を想定した経営の実施、常に金融機関と良い関係を保つ、自社の経営実態を十分把握する、経営の効率化のための思い切った施設投資、土壌分析、土壌改良等による牧草単収の向上、放牧、乳製品の加工販売、消費者の酪農への理解醸成を図る、地域との連携を強化など、中小都市周辺での畜産経営を継続するための取り組みについて意見交換が行われ、その概要を掲載いたしました。発言者の発言は、できるだけ省略することなく記述して、ワークショップの場の雰囲気までもわかってもらえるようにしましたので、今、危機に立ち向かっておられる方々、さらに、これからもやってくるであろう危機に準備されている方々の参考となれば幸いです。

令和6年1月

一般社団法人 全日本畜産経営者協会
(全日畜)

目 次

・ ワークショップ（広島会場）	プログラム	1
	プログラム	1
	発表者の紹介	2
・ 全日畜 畜産経営の危機克服ワークショップ（広島会場）の概要		3
	◎事業の概要とワークショップの趣旨についての説明	4
	◎ワークショップ第一部 事例紹介	5
	◎ワークショップ第二部 意見交換	17
・ 発表者資料		39
	株式会社 松永牧場 松永 和平 氏 資料	39
	株式会社 福田種鶏場 山上 祐一郎 氏 資料	42
	株式会社 久保アグリファーム 久保 正彦 氏 資料	45
・ 会場アンケート結果		49
・ 報道記事		53
・ 現地調査概要		55

令和5年度「全日畜ワークショップ（広島会場）」

畜産経営の危機を克服し、持続発展のヒントを求めて

- ◎ **開催日** 令和5年11月16日（木曜日）
- ◎ **時間** 13:00（開会）から16:00（閉会）
- ◎ **会場** 広島ガーデンパレス
2階「孔雀」
〒732-0057 広島県広島市東区光町1-15-21
TEL : 082-262-1122(代)

- ◎ **プログラム**

第一部 13:00 ~ 14:10

畜産経営者等のゲストから、現在畜産経営を実施・継続されている今回の畜産危機をはじめとした危機に当たって、どのように対応してこられたか、また、その対応における課題等についての報告発表

休憩 14:10 ~ 14:25

第二部 14:25 ~ 16:00

会場参加全員による、今回の畜産危機を乗り切るための対応策などについて意見交換を行い、畜産経営の危機を克服し、さらに継続発展するための取組についてのヒントを追求する

一般社団法人 全日本畜産経営者協会
(全 日 畜)

1 全日畜「危機克服」ワークショップ（広島会場）の概要

- ◎ 開催日 令和5年11月16日（木曜日） 13:00 ～ 16:00
- ◎ テーマ 畜産経営の危機を克服し、持続発展のヒントを求めて
- ◎ 会場 広島ガーデンパレス 2階「孔雀」

2 近年の畜産経営危機の乗り切り事例及び、今後の対応方向について、意見交換を行います

	<p>島根県の畜産経営者</p> <p>株式会社 松永牧場 代表取締役社長 松永 和平 様</p> <p>（肉用牛経営者から）</p>	<ul style="list-style-type: none">・島根県益田市種村町の本場、分場合わせて、和牛と交雑種の肉用牛7,633頭（令和5年9月）、搾乳牛900頭を飼養して乳肉複合経営で、牛、安心、環境、地域、食について独自の理念を持って取り組みを行っている。・安全で安心な牛肉生産についてはJAS認定を取得し、畜産環境対策の徹底、食品製造副産物、食品ロスの有効利用による廃棄物の削減、耕種農家との連携によるWCSの利用等に努め、常に地域との共存共栄を考え続けながら肉牛生産を行っている。・山陰水害により孤立し、電気が12日間停電。・常時雇用者は27名
	<p>岡山県の畜産経営者</p> <p>株式会社 福田種鶏場 代表取締役社長 山上 祐一郎 様</p> <p>（種鶏孵卵経営者から）</p>	<ul style="list-style-type: none">・1931年に卵用種鶏1,000羽で創業し、1954年に株式会社福田種鶏場となる。・国内初めてブロイラー専用種を作出するなど黎明期の養鶏業界にあってパイオニアの役割を果たした。・1982年からブロイラー種に特化し、種鶏の飼育、雛の孵化、販売を行っている。・2020年に新鋭孵卵機の設備に多額の投資をして能力を倍増させて、孵卵業務の集約化を図っている。・種鶏保有15万羽、ブロイラー初生雛の年間出荷羽数2,700万羽。
	<p>広島県の畜産経営者</p> <p>株式会社 久保アグリファーム 代表取締役 久保 正彦 様</p> <p>（酪農経営者から）</p>	<ul style="list-style-type: none">・広島市佐伯区の地に1941年に創始者の久保政夫氏が自ら開墾したのが農場の歴史が始まり。・現在、乳牛は経産牛70頭飼養、生乳550～600t/年を生産。国産飼料給与にこだわり、草をお乳に換える生産理念（土・草・牛）を継承し続ける事が美味しいジェラートの基本理念に、低温殺菌牛乳を敷地にあるジェラート工房（アルトピアール）で加工・販売。牧場での体験乳搾り、バター作りなど食育教育にも取り組む。

全日畜 畜産経営の危機克服ワークショップ(広島会場)の概要

日 時： 令和5年11月16日(木)

場 所： 広島ガーデンパレスホテル2階孔雀

発表者： 松永 和平 株式会社 松永牧場代表取締役社長

山上 祐一郎 株式会社 福田種鶏場代表取締役社長

久保 正彦 株式会社 久保アグリファーム 代表取締役

(敬称略)

参加者 31名

生産者3名、行政1名、飼料メーカー等11名、畜産関係団体8名、
報道関係者1名、全日畜7名 (うち事業推進委員会委員2名)



会場全景



開催県挨拶

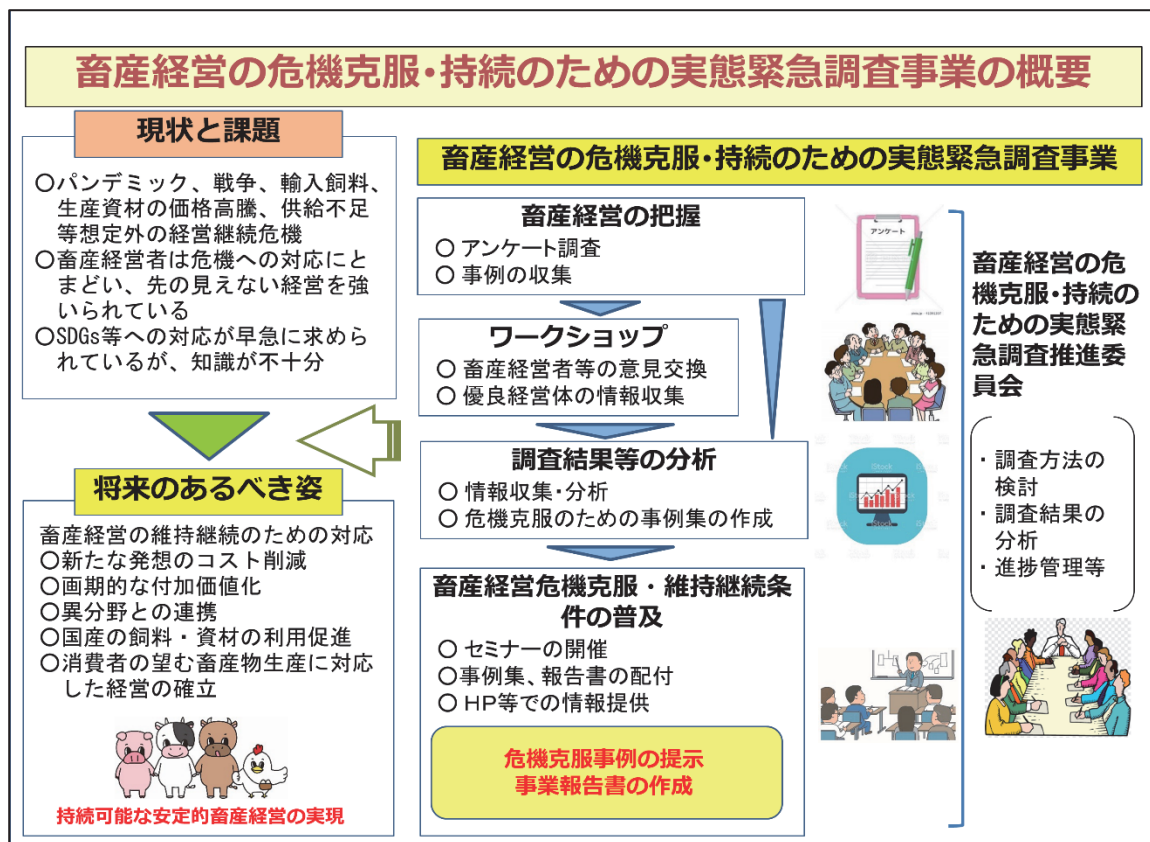
広島県配合飼料価格安定基金協会
中西英三 理事長



主催者開会挨拶

全日本畜産経営者協会
鶴藺眞佐彦 理事

○ 事業の概要とワークショップの趣旨についての説明



近年、配合飼料価格や各種資材価格の高騰、さらに、新型コロナウイルスの蔓延、いわゆるパンデミックの発生に伴い、畜産物需要の低下、畜産物価格の低下という事態が発生。さらにロシアのウクライナ侵攻による物流の停止など、今、我々の畜産業界は、今まで経験したことのないような危機に陥っている。

しかし、いわゆる商系の飼料を使っている全日畜会員は、それを克服し、さらに発展させていこうという方々も多く、それらの事例を収集し、事例集を作成し、その事例の中から各経営者が該当する部分をピックアップして、経営の参考にしていただくことで、日本の畜産の発展に資する事業。具体的には、まず全体を調べるためにアンケート調査を行い、平行して事例を収集し、ワークショップを開催し、危機を実際に克服し更に発展させておられる経営者とその関係者で討論してより深く検討し、それらを事例集にまとめ、公表する。

ワークショップ第一部 事例紹介

○ ゲストからの発表（事例紹介）

発表者：松永 和平 （株式会社 松永牧場 代表取締役）



◆経営の概要

- ・ 当社は、島根県益田市種村町に本場がある。(株)松永牧場は、肉用牛の繁殖・肥育専門の牧場。(株)メイプル牧場は酪農専門の牧場。(株)石見ウッドリサイクルは、木質系の産廃の中間処理をする会社で、山口県の田万川に肥育牧場の(株)萩牧場がある。(株)ソーラーファームは、松永牧場、メイプル牧場、萩牧場の牛舎の屋根に太陽光パネルが載っており、6.5メガの発電能力あり、年間売電収入が約3億円の会社。
- ・ (株)楓ジェラートは、メイプル牧場の牛乳を使ったジェラートを作る会社。さらに、最近(株)浜田メイプル牧場を立ち上げた。肥育牧場が酪農をする理由は、和牛から和牛を産ませるのではなくて、子牛の生産の拠点の1つとしてホルスタイン種から和牛なり交雑種を産ませていくことが目的で、2つの酪農部門を形成している。
- ・ 松永牧場は、昭和48年に会社設立し、ちょうど今年50年目を迎える。松永牧場は、肥育専門の本場と繁殖専門の分場に分かれており、全体で肉用牛が7,633頭。現在は、繁殖部門は1,200頭の繁殖牛がいる。産まれた子牛は市場から購入する場合と同じように、9か月間繁殖牧場において本場に上がってくる。メイプル牧場は、平成19年から搾乳を始めた。ホルスタイン種経産牛1,269頭のうちの1,027頭が、9月末現在で搾乳をしている頭数。1,269頭には、乾乳牛247頭が含まれる。大きな特徴は、酪農でありながら和牛の繁殖牛が196頭いる。乳牛は、大体40～45キロの餌を食べて、35キロくらいの牛乳を出す。たくさん搾るためにはたくさん餌を与える。しかし贅沢で、残した餌は食べないので、この餌を全部集めて、和牛の繁殖牛に与える。逆に言うと、和牛の繁殖はそれしかないから、仕方なしにそれを食べて、子供を産んでいる。
- ・ 山口県にある萩牧場の特徴は、どのくらいの省力化ができるかのためにつくった会社であり、現在職員の配置は3人。2人出勤したら仕事ができる体制というのがこの萩牧場。

(株) 浜田メイプル牧場は、先ほどと同じように、搾乳している牛は 774 頭。ここにも繁殖和牛が 180 頭いる。

- ・松永牧場は、現在肥育された牛の約 7 割が東京方面へ出荷されている。2 割が地元で消費、1 割が神戸に出荷。繁殖牧場では、1,200 頭の母牛を飼養し、8～10 産連続出産をさせて、肥育して出荷。当场では 8 産でも子牛は普通に生まれてくるし、1 年 1 産も全部クリアしている。労働力は、12 人の職員を配置して、7 人出勤したら仕事ができる体制にしている。特に、繁殖部門については、若い女性の就労者が多いのが大きな特徴。肥育は 18 人の職員が配置されており、13 人出勤したら仕事が成り立つ。
- ・平成 19 年から搾乳を始めたメイプル牧場は、50 ポイントの回転式パーラーで搾乳しているので、1 回転するのに 15 分かかる。1 時間に 4 回転するので、1 時間に 200 頭の搾乳が終わる。
- ・メイプル牧場は、49%は異業種が出資した会社である。浜田メイプル牧場も、49%は異業種が出資している。私が思う酪農感覚は、異業種が見ても魅力のある会社とならなければならない。そういう農業をやっていききたい。酪農経営はそれに当てはまると思って、異業種に参入していただいている。特に異業種が入るとなると、金融機関の動きが、農家がやるよりも遥かになめらかになり、いろいろな形の課題を一緒に考えてくれる。そういうメリットも相当あるので、異業種の農業参入は、大いに私は歓迎している。
- ・山口県の田万川にある萩牧場は、約 1,600 頭の牛を 1 棟の長い屋根続きの牛舎に収容しており、省力化が成り立つ。しかも、9 か月以上の牛だから、餌の種類は 3 種類しかない。こういうことで省力化した形を取っている。3 期目に入っている浜田メイプル牧場は、24 ポイントの回転式パーラーによる全自動の搾乳施設を装備している。これが 2 機並列で並んでいることがこの大きな特徴。これによって毎日 800 頭の搾乳が成り立っており、ここも 49%は異業種が出資した共同経営体である。
- ・松永牧場グループには 2 つの大きな特徴がある。その 1 つは、食品残さの飼料化プラントである。使う残さは、食品工場から出る「おから」、「焼酎の搾りかす」、「酒粕」など。また、今、国が進めている飼料用米も使用している。今は飼料用米もほとんど 3 か月もたなくて MA 米に変わっていつている。それに、消費期限切れのそうめん、乾めん、パスタなど、あるいは、バナナ、パイナップルなども使用している。スーパーではパイナップルをカットパイナップルで出すために、周りをカットした残りが毎週 20

トン以上入ってくる。そうしたものを栄養計算して混ぜながら、コンプレッサーで全て空気を抜いて、乳酸菌を入れて嫌気発酵させて 30 日間かけて餌を作っている。

- ・季節によって入るものが違う。あるいは入る量が違う。だから、これを全て栄養計算しながら安定した餌を作ることが一番難しい技である。それともう 1 つは、乳酸発酵だから、サルモネラ菌のような食中毒関係の菌が発生することによってかえって事故が起きることもあるので、そうしたこともしっかりと点検しながら作っている。毎日大体 50 トンの餌を作って、毎日 50 トンが消費されている。
- ・次に、太陽光パネルでエネルギーを生産する（株）ソーラーファームという会社である。ここも異業種が出資しているが、大きな特徴は、地元の銀行も出資した会社である。6.5 メガワットで 18 億 8,000 万円くらいの投資が必要であるが、金融機関が出資することによって、保証も付けずにきちんとした経営ができています。現在 13 期を迎えていて、8 期で繰越欠損金も全てなくなったが、あと 7 年したら FIT (Feed in Tariff: 電力の固定価格買取制度) がなくなる。そうすると、今度はここに蓄電池を入れて、太陽光発電で 3 つの牧場全てを運営できる方式を今検討中。
- ・さらに、(株) 益田大動物診療所というグループ会社で、4 つの牧場を診療する、あるいは予防対策を取る、あるいは酪農部門を指導するために、10 人の獣医師が常駐していて、毎日 4 つの牧場の管理、一部酪農部門は運営にも参加している。これによって酪農部門、食品残さの飼料工場なども、全てこの人材による設計、あるいは検査によって全部成り立っている。ただし、4 つの牧場は全て農業共済には加入している。
- ・最後に、(株) 石見ウッドリサイクルという木質系の会社について説明する。松永牧場の堆肥は、平成元年から法面緑化資材として販売していた。法面緑化資材として販売するということは、バーク堆肥が必要。それが平成 8 年から 10 年にかけて、チップの製品輸入が始まって、チップ工場がだんだん廃業して、バークがなくなった。
- ・破碎した破碎物を堆肥化して、バーク堆肥の代わりに法面に吹き付けるやり方でやってきたので、平成 12 年からは公共事業の伐採木は産廃になるという情報を得ながら、異業種と連携して、会社を立ち上げて進めている。現在は、産廃も法面緑化資材に代わってきたので、建築解体については、岩国にある日本製紙、再生エネルギーの材料である。伐採木については、今、おがくずの入手が困難なので、破碎したものを 4 つの牧場の敷料として利用している。

◆畜産経営の危機

- ・今までの 50 年の中で、一番の危機は、まずは山陰水害。これは約 2～3 週間くらい孤立して、電気も来ない状態が続いた。
- ・次いで、飼料価格、燃料価格、電気料金の高騰。これは現在の危機の一番の源である。牛に関する事として、BSE の発生や島根県もセシウム汚染の輪の中に入ったということで、セシウム汚染の汚染県に指定されて、島根和牛の価格が大暴落した。

◆畜産経営の危機への対応

➤ 山陰水害

- ・山陰水害のときは、益田市の許可を得て、自分で道路を造って、3 日目に餌が入ってくるようにした。問題は電気であるが、農場から海まで全ての電柱が倒れていたの、電柱が立っているところまで電気が来るように復旧するのに、12 日間かかった。当時は、私も消防団員であったから、消防団のポンプを借りて、川から水を上げることによって水の確保をした。その後は、道路がつながったため、発電機を持ってきた。
- ・そのため今では、1 本だった道路が 3 本になり、3 方向から入ってこられるようにした。電気も 1 方から入ってきていたのを 2 方から。つまり、西側と東側から、どちらからでも電気が上がってきて切替えができるようにした。そして、発電機を取り付けたというのが現在の状況。

➤ 資機材価格の高騰

飼料価格、燃料価格、電気料金の高騰については、危機になったからすぐに対応することはなかなか難しいが、今やっていることは、WCS を 5 割増して農家をお願いして作ってもらうことによって、一昨年まで 5,000 個だった WCS の数が今 8,000 個にした。また、中国産わらがロックダウンで相当高騰したが、出雲市の稲作農家に頼んで稲わらを集めた。

➤ BSE 関連

- ・BSE については、牛飼いは本当に大変だった。熊本県では、捨て犬ではなくて捨て牛の映像がテレビで放映されるなど、これで畜産は終わりだと考えた人がたくさんいた。このとき、国がどんな対応をするか農林水産省に問い合わせたところ、国の返事は、「全て責任は国が取る。だから、損しても出荷してくれ、差額は補填する」ということであった。
- ・しかし、BSE 検査ができないと、出荷ができなかった。そのため、島根県に頼んで、1

回当たり 30 頭検査ができたので、毎回その頭数を出して検査をして、枝肉を保冷車で東京市場に送って販売した。そのような対応をしたが、国はこれからもう 1 回和牛の復興を目指すという話しをしているということを聞いて、ならば補助金の対象になるよう要請した。

- その当時は、補助金返還に入っていた補助金がたくさんあったので、補助事業を活用して、平成 15 年に 800 頭の和牛の繁殖肥育一貫牧場をつくることができた。危機問題が出たときには、国がどういう一手を打つか。まず、それをきちんと考える必要がある。

➤ セシウム汚染

セシウム汚染は、宮城県登米町から入った稲わらが汚染されていたということで問題になった。わらの回収の仕方が、東北とこちらでは全然違う。島根県は湿田が多いので、刈り取ったらすぐに取りないと、わらは腐ってしまう。だけど、東北は乾燥したうえに乾田だから、倒れる前に取る。だから、3.11 を過ぎた 4 月初めに取った稲わらが汚染されていたということで、島根県にそういう稲わらが入った。

➤ まとめ

- 以上のような形で危機を乗り越えて対応してきたが、私が思う危機の対応の仕方は、平生から危機を想定した経営をする必要がある。危機になったとき、いくら慌てても、私はどうしようもないと思う。私が考えることは、とにかく経営体質をよくすること。
- それから、金融機関からの資金の借入れは、借りなくてもいい状況であっても、きちんとした借入額の枠を確保すること。これによって、いざというときに対応しやすい。今回のように、資機材高騰が起きた後の借入れを申し込んでも、まず金融機関は貸してくれない。それによって破産する牧場がたくさん出ているので、日頃から借入枠をきちんと確保することが重要。
- しかも、畜産は大きなお金が動くから、一番大事なことは、自分の会社の自己資本比率くらいはきちんと掴んでおくべきである。今、松永牧場の自己資本率は 55%。メイプル牧場は 76%。ただ、萩牧場はまだ始まって 6 年目、浜田メイプルはまだ 3 年目なので、私はこれをできるだけ早いうちに自己資本比率を 40% に持っていきたい。なぜ 40% なのかというと、危機に際して、牛を評価価格で販売したら、全て借入金がなくなって土地と建物が残る割合が 40% だと思う。それをクリアすることによって、安定した経営が維持できて、いざ危機があっても残れる経営ができると思う。

発表者：山上 祐一郎（株式会社 福田種鶏場 代表取締役社長）



◆経営の概要

- ・所在地は、岡山県岡山市東区瀬戸町に立地している。もともとは岡山市福田で創業しており、その地名を冠して福田種鶏場と名乗っている。
- ・業務内容は、養鶏業における種鶏孵卵業で、商業用鶏の親鳥を飼育して、産まれた卵をひよこにかえすところまで行って、そのひよこをブロイラー養鶏場へ納品している。
- ・創業は 1931 年（昭和 6 年）。私の祖父の山上茂吉が事業を始めてから現在 93 年目を迎えている。創業当時はまだブロイラーという鶏はいなかったため、卵用鶏の育種改良事業に取り組み、三元交配の自社ブランド鶏を全国的にヒットさせたそう。
- ・1950 年代には、国内初のブロイラー専用種を作出したりもしたが、1960 年代になって外国鶏の輸入が解禁され、いわゆる「青い目をした鶏」のプレッシャーにさらされた。そして最終的には自家育種をあきらめ、外国鶏種の導入と繁殖にシフトした。
- ・その頃、イギリス原産のブロイラーであるチャンキー種と出会い、総合商社の丸紅と合弁で(株)日本チャンキーを設立し、チャンキー種を日本で初めて輸入した。ロングセラーとなったチャンキー種は、現在では国内肉用鶏の 99% のシェアを占める品種に育っている。
- ・その後、卵用鶏の取り扱いを中止して肉用鶏の種鶏孵卵事業に特化していったところ、2000 年代からは国産鶏肉需要が高まり、国内餌付け羽数が年率 2% くらいの割合で右肩上がりに増えた。その中で、年間出荷羽数も 2,000 万羽を大きく超え、もともとの設備では足りなくなったため、兵庫県の孵卵場と提携して二事業所体制を敷いた。
- ・そして迎えた 2020 年、創業 90 周年を機に孵卵場を岡山市郊外へ移転新築して規模拡大を図り、分散していた孵卵業務の集約を果たした。その際には、本社機能も同地へ移管。創業の地をあとにして、第二の創業ともいえるべき全面的リニューアルを実施した。
- ・社員は 84 名、飼養畜種はブロイラー種鶏、飼養規模は種鶏保有 15 万羽、孵卵機入卵能力 211 万卵。これはワンセットで 211 万の卵を温められるということ。年間の生産量は、ブロイラー初生ひなを年間 2,700 万羽出荷。国内で年間に餌付けされるブロイラーのひな約 7 億 7,000 万羽のうち、3.5% を当社が担っている。出荷先は、中四国、近畿地方、東は静岡、西は長崎までを商圏にしている。

◆畜産経営の危機

- ・危機克服の話題として、当社がいかに本拠地移転を果たしたかという話をしたい。旧孵卵場は木造瓦ぶきで、当時日本最古の孵卵舎とも言われていた。建設が昭和 22 年だから、戦争が終わった 2 年後。その年は日本国憲法ができた年で、多分まだ建築基準法もなかった時代だった。建設当時は見渡す限りの田んぼの中に造ったつもりだったが、その後、戦後の経済発展とともに周辺宅地化が進み、孵卵場所在地が住居専用地域に指定されてしまった。そうすると、住宅以外は建ててはいけなかったので増改築もままならず、建物を温存するしかない状態だった。
- ・孵卵場を建てるとなると、年商を上回るほどの投資額が必要であり、財務的な負担はとても大きい。そのため先代の時分から本社移転構想はあったものの、ずっと先延ばしされてきていた。
- ・古い施設であるため、近年増加している自然災害の影響はまともにくらった。台風や豪雨によって何度も床上浸水の被害にあい、孵卵機の一番下の段の卵は水につかってしまったこともある。また、増改築を繰り返した建物は、作業スペースや作業動線の制約も多く、手狭な中でぎりぎりの作業を行うため生産性向上にも限界があった。

◆畜産経営の危機への対応

- ・そうした危機を打開するべく、思い切って本拠地を移転し新しい孵卵場を建てることにした。海外ではグリーンフィールド・プロジェクトと言うが、修繕や増築ではなく、真っさらな土地に新たなものを造ることを決断した。創業地にこだわらず、全く新しいところに転出することで設計とレイアウトが自由自在になった。主力設備については、世界標準を意識してオランダ式の最先端孵卵設備を導入した。国内の孵卵業の規模は世界と比べて小さいため、国産孵卵機はあるにはあるが技術的に後れを取っており、世界五大メーカーと言われるメーカーの中でも先進的といわれるオランダ製の孵卵機を選んだ。
- ・資金的には、旧本社が街中だったため、すんなり売却することができたのは助かった。会社所有の土地は、住宅建設業者に売却した。
- ・施設の建設にあたっては、農林水産省の「強い農業・担い手づくり総合支援交付金」通称・強農を活用させてもらった。借入金は、政策金融公庫の制度融資でまかなった。
- ・また、海外製の機械、先端設備を使いこなすため、内閣府のプロフェッショナル人材戦略事業を活用して、外国語に堪能な人材、日本の製造業でものづくりを経験した人材

を採用し、新孵卵場の操業に尽力してもらっている。

- 新しい施設を建てる経験を通して実感したことと言えば、まず資金面では、孵卵設備がどんどん高度化、高額化している中で、強農（強い農業・担い手づくり総合支援交付金事業）という補助事業を活用できたことが大変大きな支えになった。
- 次に実際に稼働してみて、やはり数十年前の古い設備に比べて最先端の設備は動物生産性を向上させることができるということ。
- 動物生産性、すなわち Animal Productivity については、畜産をやっている以上、これを最大の強みにしなければいけないと思っている。労働生産性とか、生産設備の稼働率も大切だけれども、まずもって動物の生産性を上げることが一番重要だと思う。
- 例えば商品化率で言うと、新しい機械によって 1.6%アップした。それから、孵化したひなの体長が 1.2 センチ長くなった。これは専門的な話になるが、ひなの循環器官、心肺機能が充実し、消化器官が長くなっていることの証明でもある。そうしたひなは、ブロイラー農場で、肥育したときの飼料要求率が改善するといわれている。そのように動物生産性を産業全体で上げていくことが、危機克服にも、サステナビリティにもつながるだろうと思うし、実際にそうした手応えを感じている。
- そのほか、労働生産性も、最新のオートメーション機械によって、人時生産性（従業員一人が 1 時間働く際の生産性）が 50%改善しており、バイオセキュリティの高度化によって、鳥インフルエンザの防疫対策も向上した手応えを感じている。

発表者：久保 正彦（株式会社 久保アグリファーム 代表取締役社長）

◆経営の概要

- 歴史的には、今 2 代目として経営をやっている、3 代目の息子が一部関わっている状況。広島県の佐伯区、宮島を基点とする、海の北のほうで、直線距離で 10 キロくらいの山間で標高が 370m くらいところに農場がある。
- 創業者は、もともとは地元の間人であるが、小説家を目指して東京に行ったけれど、体を壊して八丈島に行くことになり、そのまま 10 数年八丈島で牛を飼っていた。そこで知り合った私の母親と 23 頭の牛を連れて砂谷村というところに帰ってきて、酪農を始めたのが 1941 年。もともと広島県の西部は、酪農がほとんどゼロだったらしく、創業



者も地域活性化を含めて広島県西部、山口県の一部に酪農を広めて、牛乳の農協プラントをつくった。

- ・その後、昭和 38 年に牛乳の農協組織のプラントを解散して、地元で牛乳の工場を造った。そこでは5号機で始めて、もともと1号だったが、1号だと毎日ということになり、5号でやれば900cc、3日に1回でよい。それを最初は宅配オンリーで始めた。一番多いときで4万5,000軒くらいの宅配があったが、今は1万5,000軒くらいになった。やはり宅配を取られる方も減っている。もともと自ら作って自ら売っていくのが農民の自立だという考えを持っていた。基本的な考えは今も変わっていない。宅配部分が全体の売上高の8割を占めている。
- ・久保アグリファームと「砂谷牛乳」は組織が違うが、私は両方の社長をしている。先代の自らが作って自ら持っていくという考え方は、牧場の6次化で進めたジェラート製造の部門にも生きている。今から11年くらい前、私は2代目で、次につながっていくような事業をやっていないなという意識があった。6次化については頭の中にあり、中央酪農会議の集まりで、生乳販連が主催して日本でジェラートをやっている生産者が集まる組織があって、そこに参加する機会があり、その意識が強くなった。その当時、物を売ることは顔の見える関係をつくるしかないのではないかと、酪農の発展の原点は消費者交流だということが私の持論であって、各地からお客さんに来ていただくようになった。
- ・初めは年間100人くらいの方が牛を見に来る程度。この頃は、広島市内に5万軒くらい宅配をしていたので、どういうところでお乳を搾っているのだろうか、どういうところで牛乳を作っているのだろうかとお客さんたちも興味があって、ちょこちょこ来られていた。ジェラートを11年前に始めて、今は年間10万人の来客がある。コロナのときも11万人はいかなかったが、去年あたりからまた増えて、ジェラートを食べてもらって、牧場の原風景を見てもらっている。
- ・酪農の理解醸成のためには、牧場は大きな要素であるけれども、私のところの牛乳やジェラートは、他の大手と比べたら値段がかなり高い。なぜそこにこだわっているかといったら、先代からの教えとして、牛乳商品は、値を高くつけて売れなかったら絶対にだめだということがあった。一般的には、付加価値、付加価値と言うけれど、情緒的価値である。どれだけそれを商品の中に織り込めるかが一番重要。牛乳やジェラートはどこで食べてもどこのものでもそんなに違いはないが、その中に作り手の理念や

哲学、歴史がどれだけ織り込まれているかが結構重要な要素になる。作り手の思いをしっかりと織り込むためには、生産現場であったり、それを作っている人の思いであったり、消費者交流を通して伝えていくことでしかブランド力を維持していくことは難しい。農産物は、特に消費者の見る目は厳しいので、私たちの仕事では販売が一番難しい。

◆畜産経営の危機とその対応

- ・現在、13 町歩くらい牧草を作っているが、山を削って平らにしたのが当牧場の特徴である。大体1区画が2～3haの区画の飼料畑である。最近は雨が多く降るようになり、昨年も非常に雨が多くて、水はけの問題が出てきた。2～3年前から、暗渠排水をしたり、サブソイラーを入れるなどして、いろいろなことで対応しながら湛水をどうしたらよいか考えている。
- ・社会的危機要因としての飼料や資機材の高騰を乗り切るために、土壌分析の実施、サブソイラーによる土破碎などを実施して、牧草の単収を上げる工夫をしている。
- ・また、種子の価格も1.5倍近く高くなっていて、新たにトラクターに自動ソーラーをつけて、少しでも種子のむだをなくす工夫をしている。種子も今までは年間60万円くらいの購入価格が、最近では120万円くらいの価格になっている。
- ・私は2代目であるが、経営を引き継ぐ3代目の経営の方向性としては、放牧酪農が確かに重要な要素になってくる。これは1年、2年先ではないと思うが、近い将来必ず日本の畜産の在り方が問われる。外国からの穀物に頼っている日本の酪農は、ずっとは続かないだろう。放牧地を少しでも拡大したいが、それにも限界がある。10年、20年放牧に耐える自然がないとなかなか難しいという大きな問題がある。3代目の息子には、ある程度受け継いでやっているけれど、私も簡単にいくものではないとしっかりと伝えてはいる。
- ・放牧中心でとなると、1年間を通して粗飼料が十分あることが前提条件になる。ニュージーランドなどのような放牧酪農による放牧に適したジャージ種の飼養と、日本の舎飼いによる濃厚飼料多給によるホルスタイン種の飼養では、酪農のスタイルが異なり、すぐに放牧に切り替えるといっても難しい。しかし、放牧は将来を見据えた中では、絶対に必要なことになってくる。
- ・3代目の思いとして、酪農だけではなく、今、年間10万人来てもらっているお客さんにいちごのもぎ取りをやらせたいから是非やらせてくれと、去年の8月頃から幅15メ

一トル、長さ 80 メートルのいちごハウスを造った。そろそろ苗を植えて、来年の春、1月、2月に収穫できるかなと思ったら、12月25日に大雪が降って、いちごハウスがぺちゃんこになった。非常に苦しい思いをして、今年再起をかけてもう1回造り直すということで、来年1月に向けて今苗を植えている。これは結構衝撃の大きい事件で、ハウスは完成していなかったのもまだ保険にも入れてなかったが、銀行から過去の実績など評価していただいて、支援いただいて、再建にこぎつけた。

- ・もう1つ、私のところも去年、一昨年頃から、のこくずが非常に不足しがちで、良質な土地づくり、草づくりができなくなった。なかなかいい堆肥ができないことで悩んでいたが、飛行場周辺の雑草を水分調整材として使うようになって、かなりいい堆肥ができるようになった。
- ・日本の農業は、ヨーロッパのように国策としての位置づけではないので、フランスやドイツのように国策として農業をどう守るかという先進農業国と比べて、日本はまだまだ価格保証のところまでもいっていない。国の施策として日本の農業をどうするかは、国の景気動向の中で徐々にだんだん変わっていくのだろうなと思っているけれど、周りが悪い、人が悪いではなかなか生き残れないので、とにかく周りがついてくるような環境をつくることでしか、我々農家は生き残れないのではないかなと思っている。

司会（松原）

では、3名の方々かの発表内容を含めて質疑応答などは第2部でお願いいたします。

第一部を終了する前に、今回発表していただいた内容につきまして、質問またはさらに伺いたいことについて専門員からまとめてもらいます。

内田 賢一（全日畜専門員）

- ・今回のテーマである経営危機に直面されたときの対策として、あるいはこれから経験するであろう畜産危機に際して、コスト削減の努力、優秀な人員の確保、融資制度の活用、国・県などの助成制度など、いろいろあると思います。
- ・皆様からは適切な御発言がありましたが、中でも経験上、最も重点を置かなければならない対策、あるいは危機を克服するために最も効果があると思われる対策がありましたら、1点に絞って教えてください。



- ・ 2点目として、いろいろな状況を踏まえて設備投資時に融資制度を活用されていると思います。将来借入金の返済などで経営危機に陥らないようにするためには、そういうリスク管理をどのように行っているのか、お伺いしたい。

神谷 康雄（全日畜専門員）

- ・ 各発表者の方々に追加で伺います。
- ・ 松永様は、資料の中にも、生産情報を消費者にタイムリーに電子化により提供と書かれておりました。そこで、事業計画や予算管理、牛肉部門の部門別の管理について、社内における情報の見える化について、具体的なお話しをお願いしたい。
- ・ 関連で、経営指標の見える化で、デジタルトランスフォーメーション（DX）、クラウド化が盛んになって、IoT の発展でスマート技術、通信技術と現場をうまく結びつけて管理する体制が発展しておりますが、そのようなものは取り組まれているのか、今後取り組む予定があるのか、教えてください。
- ・ 福田様には、事業計画の策定における経営の見える化についてです。オランダの生産技術を取り入れられて、非常にシビアな経営管理が必要ではないかと思うのですが、生産部門、販売部門、予算管理部門の部門別にどのようにしているのか。例えば部門別経営判断をするサポート技術としてKPI（Key Performance Indicator:重要業績評価指標）抽出のようなことまでされているのかどうか。
- ・ 2点目は、鳥インフルエンザについて、新しい施設に移ることによって、ある程度発生が防げる状況になっているという話でした。具体的にどのような対策を考えられたのか、少し補足いただきたい。
- ・ 久保様には、自給飼料用地の確保についてです。広島市内から1時間ほどの非常に近い場所にあり、自給飼料生産は非常に厳しいところがあるかと思うのですが、用地の拡大や耕作放棄地の利用など、もう少し具体的な課題などについてお聞かせいただきたい。
- ・ 2点目は、職員の教育や雇用の創出、消費者に生産の現場を見てもらおうと地域の活性化に取り組んでおられますが、地域の中の酪農家との共同活動、耕畜連携、土地利用での権利調整、インフラ整備などで、行政がどのように関わっているのか。あるいは支援組織があるのかどうか、具体的に補足いただきたい。



（第一部 終了）

ワークショップ第二部 意見交換

○ 発表者の回答

◆経営のリスク管理について

発言者：松永 和平 氏（株式会社松永牧場）

- ・畜産危機に際して、畜産危機になったときにどうしたらいいかという解は、ほとんどないと思います。ないから危機だと思うんです。大事なことは、国や中央畜産会などのいろいろな情報をいかに早くつかんで的確に対応するかだと思います。
- ・それと、自分の経営のランクづけとか、自分はどのくらいの経営のあれ（経営ランクに対する理解）があるんだよということを理解すべきだと思うんです。それによって対応の仕方は、いくらでもできると思うんです。自分の経営のランクは下のほうだからこの辺に気をつけなければいけないとか、いろいろなことを分かった上で情報を得るのであれば、対応もできると思うんです。皆が一緒だと思ったら、かえって危ないので、その辺だと思います。
- ・それから、資金の償還不能になるリスクは、景気のいいときでも常に考えておかないといけない。悪くなってから無理ですというのは、それは普通のことであって、常に僕は考えておく必要があると思うんです。それによってリスク管理をする。ないものはないですから、いざ何と言っても。でも、そういう思いを持って経営に当たるべきではないかなと思います。
- ・それから、もう1つ、消費者への情報ですが、松永牧場は生産情報公表 JAS の認定を受けています。生まれてから出荷するまでのトレサビほどの牛にもあるのですが、与えた薬、与えた餌など、的確に消費者に公開できるシステムの認証を受けております。ですから、カルテが1頭1頭の個体に全て入るようなシステムをつくっているんです。餌の担当者は、与えた餌が全て個体に入っているようになっていて、それを全て消費者に公開できる JAS ということで今やっています。
- ・それから、牧場内の情報交換ですが、財務は全て松永牧場の中でやっているんです。現場は、職員のパソコンと獣医のパソコン、あるいは個体管理のパソコンが皆つながってしまっていて、それぞれ職員が見ながらやっていく。例えば、この牛がおかしいなと思

ったときには、この牛のビタミン検査をしたときのビタミンAの値やコレステロールの値などをすぐに見ながら管理する。そういうこと、現場管理は現場同士でやっている。ただし、財務と現場は、お互いに見ることができないので、その辺は少し無理だと思います。

- ・デジタル化は、酪農はやっている人がいるのですけれど、肥育の場合は、情報を公開しない性格の人間が多いので、なかなかその辺は難しいと思うのですが、いずれは酪農部門からやっていきたいなと思っています。以上です。

発言者：山上 祐一郎 氏 （株式会社福田種鶏場）

- ・松永さんがおっしゃるように、経験したことがないようなことが起こるから危機なのでしょうけれど、日頃から経営をしっかりと把握しておくこと、グリップしておくことかなと思います。それは生産面もそうですし、販売面もそうですし、資金面もそうです。それは心がけております。
- ・また、財務面でいえば、普段から銀行さんの中で融資枠を確保したり、今回のコロナ危機の際は、手元流動性をしっかりと持つておくことに努めていました。
- ・ここ数年、経験したことがないようなことが次々起こる中で、不安を感じたこともありましたけれども、「暗夜を憂うことなかれ 只一燈を頼め」（注；儒学者 佐藤一斎「言志四録」）という儒学の教えの通り、よいひなを作ることこそ自分たちにできることであり、やるべきことであると信じています。鶏肉は国民の生活に必ず必要なものなので、よいひよこを作っていれば、いずれ道は開けると。精神論的な部分になりますけれども、そういう思いですべてのリソースをひよこ作りに集中するスタンスで臨んでいます。

発言者：久保 正彦 氏 （株式会社久保ファーム）

- ・ウクライナの戦争で市場価格が上がって、キヤノングローバル戦略研究所の人がおっしゃっていたのですけれど、危機が一発来たら日本の畜産は弱い。そんな畜産やめてしまえというようなことを言っている研究所がありました。
- ・危機が来てすぐだめになる農業は、もともとだめなんですね。生産コストや削減努力、優秀な人材の確保は、平生しっかりとやっている。当たり前のことを当たり前にやっていること。危機の規模にもよるのだけれど、平生しっかりと努力すること。うちの

場合、繁殖の問題で1年に授産ベースでちゃんとお乳が確保できるようになること。

- ・人材は、私のところは、今、牧場だけだと4人体制ですが、20数年勤めている子が2人います。やはり居心地のいい場所というか、皆ね、牧場が好きなのです。もともとうちが好きで入っている子なので、本当に周りからも久保さんのところの実習生、社員はみんなすごく長いなというね。これは私の平生の対応がいいのか、悪いのか、よく分かりませんが、そういうところ。
- ・融資については、私どものところは、何億円というような大きな投資はしていないので、1年、2年おかしくなっても返せるくらいのお金であれば何とかなるのかなということはありません。多く投資していないと、金融の問題や融資制度は、抜けているのかよく分かりませんが、私のところはあまりないのですけどね。平生しっかりとやっていたら、融資だってみんなつながってくるんです。
- ・経営がうまくやっていて利益が出ているということは融資にもつながっているし、全部連携している話ですよ。人が優秀だということは、やはりそれだけ生産性が上がることにつながっています。これは全部有機的につながっているのだらうと思います。

司会（松原）

神谷専門員の質問で、山上さんから経営の見える化と、鳥インフルエンザは、新しい機械を入れたらほとんど問題ないかということについて。松永さんには数値をきちんと押さえるかということについてお答えください。

発言者：山上 祐一郎 氏（株式会社福田種鶏場）

- ・経営の見える化については、今回の新孵卵場建設以前からやっていました。10年以上前、当時はまだ原価の把握もおぼつかないような社内体系だったのですが、中小機構（（独）中小企業基盤整備機構）の紹介で、広島にある自動車メーカーのマツダで長年管理会計を経験された方のところに月1回通って指導を仰ぎ、製造業の管理会計を我々のひよこ作りに生かせないかという相談をしました。
- ・マツダさんの経営のグリップは本当に事細かくて、部品単位でもあり、工程単位でもあり、時間単位でもある。その原価を押さえるパターンをいろいろと学び、全部は無理ですけども、そのエッセンスを当社の種鶏管理、孵卵管理、お客様への配送管理に生かすように社内管理会計を整理して、それをベースに月次予実管理を行っています。

- ・ただその一方で、予算にとられ過ぎず、立てた予算はその日から狂いはじめるんだという思いも常に頭に置いておいて、グリップを心がけながら、目の前で起こる新しい出来事に対しては、反射神経だとか勘だとか、そういうものも大切にしながらやっているつもりです。
- ・また、オランダの最新の機械は、セントラルマネージメントシステムが構築されており、全機械が社内の1つのコンピュータで集中制御されており、生産工程の見える化も実現しています。データをリアルタイムで見られるだけでなく、瞬時にグラフ化も可能で、過去の履歴も全部グラフで出せます。それらはスマホやタブレットで家にいながら見られますし、便利なのは、24時間365日オランダとインターネットを介してつながっていて、オランダの技術者と現状を共有しながらトラブルシューティングに当たれるようになっています。
- ・鳥インフルエンザ対策に関しては、新しい孵卵場では工場内が外気圧に対して陽圧になるように空調管理を行っています。空気の入気口は1カ所に限定されており、そこにHEPAフィルターという目の細かいフィルターがついています。そこから導入した空気を工場全体に行き渡らせている。場内が外気に対して陽圧になっており、外に面したシャッターやドアを開けると、中から空気が押し出される格好になっているので、ウイルスや細菌が入りにくい格好になっています。
- ・また、工場内でも気圧の高低差を設けています。孵卵場では、種卵を扱う側が清浄区。羽毛を持ったひよこが産まれる側を汚染区とするのですが、清浄区の気圧を高め、汚染区に行くにしたがって気圧が低くなるように気圧階段（気圧カスケード）を設けています。それによって建物内の仕切り扉を開けたときにも、清浄区側から汚染区側に空気が流れ、けして逆流しないようになっています。常に正常区から汚染区に物も流れるし、空気もそれに沿って流れるということが何よりの防疫の高度化と考えています。

発言者：松永 和平 氏 （株式会社松永牧場）

事業計画や予算管理、それから、牛肉部門の部門別の管理について、社内における情報の見える化はどのようにされているのかについては、肉用牛部門については、IoT化については遅れており、実現していない。ただ、先ほど説明したように、牧場内の情報交換ですが、財務は全て松永牧場の中でやっています。現場は、職員のパソコンと獣医

のパソコン、あるいは個体管理のパソコンが皆つながっていきまして、それぞれ職員が見ながらやっていくシステムになっています。

◆自給飼料用地の確保と行政の支援について

発言者：久保 正彦 氏 （株式会社久保ファーム）

- ・私のところは、自分たちの川の水は、広島市の飲用水になるんですね。川上でごそごそすると大変なことになる場所なので、所有者がブルドーザーで谷を埋めたところは何も規制がないから、山を削って谷を埋めただけとか、雨が降ったら土砂崩れというような、今では絶対考えられないようなことが行われていました。
- ・今は1町歩の畑を作ろうと思ったらとんでもない話なので、自分で確保することはできないですね。何億とお金がかかるので、そんなところに作ってもどうなるかという話ですけど、これ以上土地を増やすことはできない。
- ・そういう中で、私が自給飼料にこだわっているのは、私が行った学校の創設者が「健土健民」という言葉を使っているんですね。健康な土地で健康な民ということ。私はずっと土壌学、微生物学、肥料学、そういうものを牧場の中に取り入れて、それを牛乳の1つの付加価値につなげていきたいというこだわりを昔から持っています。生産現場で、こういう取組をしているんだなということをお客さんに見せたいということので自給飼料にこだわっている。ただ、自給飼料が8割、9割を占めているわけではなくて、6割、7割近くの話ですね。
- ・そうした中で、土地づくりって、言葉では土づくりなのですが、細かいことを説明すると、お客様も大人は分かりやすいけれど、子供にはなかなか難しいのですが、こだわっているんだなということを伝える。それを情緒的価値として牛乳を1本に織り込む。小さな会社なのでね、地元で広島市内の人口120、130万をある程度ターゲットにしている牧場なので、そういう方に牧場に来てもらって、今から30年、40年たてば、多分50年、60年前の日本になるのではないかと考えています。
- ・大手スーパーは必ず撤退するだろうと思うのですが、地元密着型のこだわった酪農農業をずっと継承し続ける。あまりあちこちふらふらしらないことが一番重要ではないかなと思っています。
- ・耕作放棄地や水田の利用は、土地柄非常に難しい場所なんです。北海道だったら、隣の

牧場をやめたらそれを買って集約化できるのです。アメリカの農業はそうして大きくなっているのですけれど、日本の農業は、酪農家の場合、母屋があって、牛舎があって、目の前に田んぼがあってという酪農が最も多いじゃないですか。

- ・耕作放棄地は、基盤整備で瓢箪みたいな田んぼがある程度大きくなったけれど、水田は結局 95%くらいの補助金をかけて、ある程度確保したのだけれど、まだまだ水田専用で作っていますし、大豆とか、小麦とか、牧草が植えられるような状況では全くないです。もう1回基盤整備を、最低でも5反くらいしないと、大型化できなかつたら生産性は悪いので、ある程度地元にはこういうものを活用できるような場所は、私の周りにはないです。

○ 会場との意見交換

◆食品残渣の利用

発言者：藤井 照雄 氏 （山口県配合飼料価格安定基金協会 理事長）



- ・私も山口県の萩市で肉用牛を飼いながら、販売、加工などをやっております。今、配合飼料の高騰で大変な思いをしています。畜産農家は皆そうなのですけれど、唯一松永牧場さんは先見性があるというか、食品残渣を使った飼料工場を造られている。この発想と言うのでしょうか。どうやってこういうものが造れたというか、どうして造ろうと思われたのか。

その点を少し聞きたいのと、このプラントで作られる餌の使われ方についてお話ししていただければと思います。

- ・繁殖用と肥育用で分かれると思うのですが、配合飼料の使われ方。TMR として使われるのでしょうか、それと輸入牧草。TMR でやられるのか、どういった形で牛の口に入っていくものなのか。この基礎飼料になるプラントの造られ方と言うんですかね。その価値をどう見られているのか、その辺のところを少しお聞きできればと思います。

発言者：松永 和平 氏 （株式会社松永牧場）

- ・飼料プラントを造ろうと考えたのは、酪農と一緒にだったんです。酪農における食品残さの使い方は、よく都市近郊酪農の方がやっておられるのですが、大体失敗のケースが

多いのは、時期によって入る量が違うので、乳質がガタガタになります。

- ・安定した乳質にするためにはどうしたらいいのかと獣医たちと一緒に考えた結果、今回の乳酸発酵をさせて与えるやり方。それから、7つほど基層目標があって、これに十分はまるような餌の配合をしていく。それによって安定した餌を作ろうということが今の考え方です。
- ・そういう形で今始めましたけれど、問題は、30日間は乳酸発酵をさせておかなければいけない。20日以内にすると、中途半端ですぐ腐ったりしますので。30日きちんとやると、夏場でも2日外に出していても腐らないんですよ。そのくらい安定した餌を作っているというのが現状です。
- ・まだ作りたいのですが、食費残渣がコロナの時期にはどんどん減りまして、例えば酒粕も焼酎の搾りかすも7割くらいまで減ったことがあるんです。やはり家庭では残すほど飲まないです。それから、おまけにおからもコロナの中ではどんどん量が減ってきましたというのが現状ですが、ようやく元に戻ってきた。
- ・どのような使い方をしているかという点、酪農部門では、1頭当たり20kgくらい与えています。ですから、重量の半分は食品残渣です。肥育の場合は、前期は多いけれど、後期は少し少なめです。というのは、水分が多い餌をやると、肉質が水っぽくなるんですよ。だから、後半は少なくなります。
- ・この食品残渣の餌は、牛肉の脂質にすごくいい効果が出るんです。牛肉の味は脂質で決まるとよく言われますけれど、やはり一番いいのは米ぬかと言う人もいます。ただ、米ぬかは酸化しやすいから管理しにくい。その点、おからはそのままの形で乳酸発酵して残ってくるから脂質がよくなるということで、最近脂質で評価してもらっています。餌としてもすごくいいと思いますよ。

◆アニマルウェルフェアの取組について

発言者：藤井 照雄 氏（山口県配合飼料価格安定基金協会）

アニマルウェルフェアの取り組み状況はについてお聞きしたい。

発言者：松永 和平 氏（株式会社松永牧場）

- ・アニマルウェルフェアは、島根県でも問題になりました。犬猫と一緒に消費者に考えられたら困ると思うんです。競走馬のようなお尻をたたいて走る馬をかわいそうだと

う人、いないでしょう。ですから、動物によって偏見のある見方で、もちろん固定したものを殴ったり蹴ったりするのはおかしいと思うが、その辺は、消費者も理解してほしい。

- ・動物の環境だけは、動物に適した環境をつくってあげるべきだなとは思いますが。よくアニマルウェルフェアと言うときに、動物に対する虐待が先に出てくるのが少し難しいかなと思います。

発言者：山上 祐一郎 氏 （株式会社福田種鶏場）

- ・孵卵業界でもアニマルウェルフェアの向上に取り組んでいます。中でも孵卵場から農場に出荷できない虚弱ひなの処分方法について改善の必要があったため、当社では新しい孵卵場の建設を契機に海外製のCO2を用いた安楽死装置を導入し、アニマルウェルフェアに配慮したひなの取扱い方法を徹底しています。

発言者：久保 正彦 氏 （株式会社久保ファーム）

- ・私どもの牧場にお客さんが来られて、牛がつかないであると、それ自体が違法だというようなことを言うお客さんもいるんです。環境は確か必要だと思います。子牛を狭い場所で飼うとか、こういうことは少し問題になるかなと思うのですが、今の日本の畜産の現状を見て、この問題が表にどんどん出てくると、日本の畜産は成り立たないのではないかと。
- ・残虐性をなくして食料の確保なんてあり得ないとある人が言っていましたけれど、確かにヨーロッパとか、ある程度畜産に余裕のある国は必ずこういうことを言うてくるんです。昔から日本は外圧によって物事を変えてきた国なので、いつも外圧がかかってくるのが日本の現状です。これを100%素直にどう認めるのか、国民的にいろいろな賛否両論があるだろうと思うのですが、急速にできるような問題ではないかと、解決できるような問題ではないかと思っております。

◆ABL（譲渡担保融資）、職員教育及び補助金等について

発言者：玉川 尚治 氏 （広島県畜産協会）

- ・松永牧場さんで、牛のABL（譲渡担保融資）を使って経営資金を確保されているが、こ



れから広島でも仕組みをつくっていかうとも考えております。システムについてお聞きしたい。

- ・職員方々の教育で心がけられていることがあれば、教えていただきたいと思います。
- ・畜産クラスター事業、牛のマルキンの事業など、国の補助金等の使い方について、何か思うところがあれば、御意見いただきたい。

発言者：松永 和平 氏 （株式会社松永牧場）

- ・ABL が本格的に動き出したのは、平成 18 年代なのです。BSE が出たときに、牛は全て国が管理して、10 桁の耳標を打つようになりました。これによって牛の移動が全て分かるようになった。つまり、この牛はいつ産まれてどこにいてということが分かるので、それで動産担保を認めてくれたのが金融機関の考え方なのです。ですから、市場導入したとき、その耳標を銀行の担保に入れて、出荷したときに解除するというやり方が一般的なやり方です。
- ・他に集合動産担保設計というものもあるんです。うちは平成元年にやったのですが、松永牧場の牛は全て保証協会の担保にします。そのかわり出入りは自由にしてもいいですよということで、何億円まで保証しますという担保をつくる集合動産担保設計契約書というものもある。そのためには、常に経営の公開をする。相手方の信用が担保ですから。ただ、ABL の場合は、牛に投資したもの、ソフトをきちんとつくっておけば、金融機関が見ていて、この牛、移動したじゃないということがすぐ分かるんですよ。だから、担保というものができたと思うんです。
- ・モニタリングについては、やっている会社もあるんです。例えば全国肉用牛事業協同組合は代行してやるんです。でも、携帯を持ってやったら、担保物件がどこにあるのか、全部出ますよ。だから、そのくらい 10 桁管理はきちんとできていますし、逆に言えば、牛の世界に住所不定の牛はいないんです。もしいたら、移動も屠畜も何もできないですから、しかも、牛泥棒もいないんですよ。それも全て 10 桁の影響だと思うんです。

発言者：山上 祐一郎 氏 （株式会社福田種鶏場）

- ・社員教育で言いますと、特に何か体系立ってやっているわけではないのですが、ブロイラー業界は割と集合研修会みたいなものが多いので、そういうものに積極的に繰り出しているといいます。
- ・あとは先ほどマツダさんの話をしましたけれど、製造業を参考に、製造業が利用している品質管理検定「QC 検定」というものがあるのですが、そういうものを受講したり、受験してもらったりしています。
- ・また、種鶏孵卵業は、割と海外とのつながりも多いのですが、私が海外出張に行く際には、1人で行かずに若手を順番に帯同するようにしています。
- ・国の補助金に関しては、当社が以前そうだったように、国内の孵卵設備が老朽化しており、将来の供給制約要因になりかねないと危惧しています。特殊な設備が必要になるので、機械も海外から高額な専用設備を導入しなければならないのですが、それが今ある農林水産業の補助事業にフィットしない部分があります。例えば、孵卵場は広域性があるのに対し、有力な畜産補助事業である畜産クラスター事業ではローカル性を求められるあたり。あるいは、孵卵場では高額な設備投資が必要になるのに対し、補助事業の費用対効果計算が高すぎるハードルになってしまうところ。孵卵設備の法的耐用年数が短すぎる場所も含めて、使いにくさに繋がってしまっている気がします。
- ・本来は、専門性が高く高額投資の必要な孵卵業こそ、公助によって支えていただきたいと思うのですが、その辺が少しギャップというか、ずれがあるなと思っています。

発言者：久保 正彦 氏 （株式会社久保ファーム）

- ・私のところは、従業員が4名。ジェラート部門と酪農部門を併せても7名くらいなので、社員教育はあまりやっていないのが現実です。従業員が何を考えているか、乳牛のほうと意見交換会を年に2回くらいやっている。私と社員は結構話をするほうなので、その中で、あとはお互いの信頼関係をどう深めて、相手も信頼でやるしかないの、従業員を責めるのは愚の骨頂です。
- ・私は、社員教育は経営者自身にある程度度量がないと社員教育はできないと思っています。感情を出すと、人は必ず分かりましたと言う。限界はあるのですが、人を変えるのではなく自分が変わるしかないというのが基本なので、あまり社員教育はしなくても社員は育つのではないかなと思っています。

- ・クラスター事業は、私は使いにくいとも思っていないし、補助金は皆の税金を使っているということが頭の中に常にありましてありがたいなと思っております。アンケートとずれるのですが、銀行は、牧場でこれだけ人が来るのだったら入場料を取ったらいのではないかとされるのですけれど、補助金をもらって事業をやっていたら、入場料なんか恐れ多くて取れない。補助金に関しては、使っていて使いにくさもないし、今のところ満足しております。

◆経営者としての視点について

発言者：谷口 大 氏 （広島県畜産課 主任）

県内の農業者は農業者としての側面がまだ強く、経営者の視点、発展性を持った考え方をされている方が少ないなということがあり、経営者の視点がまだ足りないのが実情です。経営者になるために何をしたか。何をきっかけに経営者の視点を持つようになったか教えてください。



発言者：久保 正彦 氏 （株式会社久保ファーム）

- ・私も親から継いで、法人にする前は個人経営で、お金も家計もちゃんぽんみたいな、補助金をもらってもどうやって使っているのか分からない。株式会社によって、意識は全く変わるんです。
- ・会社の金を使うとアウトですから。銀行との信頼も、お金の融資が非常にたやすくなるんですね。簿記がちゃんと分かれていますから、そういう面で融資を受けやすい。農協の融資が比較的多いのでしょうかけれど、私は広島銀行とか、そういうところの融資で今までやってきました。
- ・法人にすることで意識は変わるし、ある程度の規模まで行くと、法人にしなければやっていけなくなります。私は法人になることで経営意識は変わるだろうと思います。

◆畜産の2024年問題

発言者：勝又 健太 氏 （日清丸紅飼料株式会社西部支店 大動物営業課）



飼料メーカーも直面している問題なのですが、2024年問題で、広い範囲に出荷される場合に何か考えているか、配送・輸送関係で今後気をつけていきたいことがあれば、教えていただきたい。

発言者：松永 和平 氏 （株式会社松永牧場）

- ・24年問題は、運賃の値上げから入っていきますので、本当に大変厳しいと思うんです。もっと大変なのは、生きた動物を移動させること。例えば、妊娠牛を北海道の十勝から島根まで持ってくると、3日かかるんです。残業時間をクリアして運転手さんが働かないと問題になるので、中間基地がないんです。途中で牛を乗せかえることもできない。
- ・運転手の皆さん方と話をしますが、3月いっぱいまでなら移動できるだろうと。つまり、十勝で牛を乗せて、小樽からフェリーに乗って、新潟から舞鶴まで来る。そこからまた走ってくる。だけど、4月以降はフェリーの中が暑すぎて死にますよというのが状況なのです。
- ・制度を作ったのが厚生労働省ですから、農林水産省が言っても何も聞いてくれないんです。生きた動物の移動は、少し無理な気がします。これからどうなるのか、皆悩むところだと思うんです。運送会社から明確な回答がまだ来ていないので、僕らがこうしてくださいと言うわけにもいかない。確実に言えることは、運賃だけは値上がりします。

発言者：山上 祐一郎 氏 （株式会社福田種鶏場）

- ・当社の場合、対応するところまではしていないのですが、同じ業界、ひよこのデリバリーを見ていると、ツーマンにしたり、遠隔地の場合はリレーにしたりですね。トラックから積み荷を瀬取りしてということをしているところもあります。
- ・あとは、松永さんもおっしゃっていましたが、生きた動物を運ぶ上で、アニマルウェルフェアに関して、輸送に関する技術的指針が局長通知で発信されたところです。

海外では、生きものを運ぶ場合の特例措置が認められているようなので、業界団体などを通してリサーチしていくことも必要だろうなと思っています。

- ・ひよこの場合には、行きはノンストップで走りたいんですね。帰り、空になってしまえば、休み休み帰ってくればいいので、とにかく生きものを運んでいるときは真っすぐ走り切れるくらいの例外措置は設けてほしいなと思っていますところ。

発言者：久保 正彦 氏 (株式会社久保ファーム)

- ・私のところは規模が小さくて、そういうことを考えることはあまりないです。私のところは全部自家育成で、年間 50 頭くらい売れるのですが、今は何もしていない。でも、大なり小なりいろいろ影響はあるとは思いますが、24年問題についてはあまり考えていない。

◆施設の集約化のメリットとリスク管理

発言者：坂上 良裕 氏 (フィードワン株式会社 関西支店 養鶏課)



福田養鶏さんでは、今回孵化場を集約された中で、もともと2か所あったものを1か所に集約されています。インフルエンザ等、分散していたほうがリスクを分散できることもあると思うのですが、そういった設備を集約したほうがコスト面でメリットはあるのでしょうか。その辺の判断基準を教えていただきたい。

発言者：山上 祐一郎 氏 (株式会社福田種鶏場)

- ・まずは2つの施設とも老朽化していたので、それらの近代化が必要だったということがあります。また、集約に当たって考えたのは、あらゆる畜産施設は百年に一度くらいは病原体に侵入されるリスクがあり、それが二カ所あれば百年に二回。三カ所あれば百年に三回のリスクとなってしまいます。それならば防疫体制をより強固にした一カ所で、百年に一度のリスクを可能な限り下げようと思いました。
- ・また、孵卵業は小さな卵、小さなひよこを大量に扱う施設であるため、自動化設備、オートメーション設備が非常に有効です。海外では、集約化、大規模化を進めることに

よって工程を自動化してコストダウンができていますけれども、日本の場合、まだまだそこに至っていないと思います。このたびの孵卵場建設にあたっては、世界標準に追いつくための必要規模を念頭に置いていました。

◆畜産関係の現行制度に関する意見

発言者：小林 正明 氏 （中部飼料株式会社水島工場 養牛課長）



畜産経営をしていく上で、現行の規格や制度、規制緩和などを見直してほしいという御意見がありましたら、お聞きしたい。

発言者：松永 和平 氏 （株式会社松永牧場）

- ・制度では、マルキン制度が、ちゃんと運用できていない気がするんです。運用できていたら、90%補填があったときに、和牛の子牛がこんなに暴落するわけではないんです。
- ・肥育牧場が今、ものすごく厳しい環境にあることは事実だと思うんです。70万、80万した牛が9割補填の中で50万切りますよと。そこまで下がるのは、よほど肥育農家が厳しいということが1つ言えると思います。
- ・その制度の中で、購入者はどこに行っても素牛は買えるんですよ。出荷もどこに行っても売れるんですよ。でも、算定基準が地域によって皆違う。これはおかしいことだと思うんです。
- ・もう1つは、交雑です。交雑のマルキンは、9か月から始まるんです。9か月の子牛が今、30万2,000とか、29万、28万に下がっているはずですが、スモールから1回やった人は、今出荷している牛がまだ17万、18万。ひどいとき、3月あたりは、20万くらいのスモールを出荷していますから、スモールから一貫体制を取っているF1、交雑の農家は全く採算が合わなくて問題になっていて、子牛安定基金のようなものでカバーできないのかという要請もあるくらい問題になっています。
- ・実際に思っているほどマルキンがきちんと発動できていない。例えば餌が上がったら、きちんとクリアできているのか、そういうことは皆疑心暗鬼で、なぜこんなに厳しいんだろうということが、今の肥育農家の大方の人の声ですね。

発言者：鈴木 一郎 （全日畜 常務）

- ・今松永さんがおっしゃったことは、購入する方々は全国どこにでも行けるけれども、マルキンの発動の基準が地域によって算定の基礎となる発動基準がそれぞれ違います。
- ・今までは全国1本だったのですが、地域ごとに市場の価格が違うということで、マルキンを出やすくするためなのか、ブロックごとに分けたと聞いています。そのために、ある地域によっては出るところもあれば、ある地域によっては出ないところもある。
- ・例えば今、松永さんがおられるような地域ですと、兵庫などの価格が非常に高いので、そちらの価格に引っ張られる。しかも、量が多いものですから、ほかのところでは非常に価格が安くて、しかも、量が少ないところは、平均値が高い市場に引っ張られてしまうので、実際に大変なところなのにマルキンが発動されない。そういう矛盾が今、出てきていると理解しています。
- ・これは、前も、全国1本で矛盾があったからということで変えているらしいのですが、変えたけれど、逆の矛盾が出てきたというのが現状のようです。それについては、この矛盾については、政府（農水省）に和牛関係の方からいろいろ要請が来ていると聞いています。

発言者：山上 祐一郎 氏 （株式会社福田種鶏場）

- ・規制緩和の話ですと、今回の話にも関連しますが、特に建築基準法や消防法が非常に厳しい。当社が壁に当たったこととしては、海外製品が日本の建築物に適用されるときにJISマークがついていないからという理由でいろいろなことが難しかったんです。
- ・例えば床。樹脂製の床をコーティングだとか、金属製の壁、仕切り壁だとか、そういうもののJISマークのあるなしが非常に問われて、結果建築コストがアップしてしまう。そうすると、最終的に畜産物の価格のコストダウンが難しくなります。床だとか、壁だとか、水道に関しても、電気に関しても、建築基準法プラス消防法ですね。
- ・孵卵機は卵を温める機械ですと言っているのですが、大きいもの、大型孵卵機なので、これは部屋ではないかと言われて、そこにスプリンクラーをつけなさいと。ドリルで穴を開けて、機械の中に無理やりスプリンクラーをつけました。

発言者：久保 正彦 氏 （株式会社久保ファーム）

- ・私のところは、ジェラートを作ったり、チーズを作ったりするのですが、広島市は

政令指定都市なので市が関わっているんです。単価がころころ変わるので、市の職員が言っていることが二転三転する。お願いすると、上司と相談しますと言って、いつになるのかさっぱり分からないこともあります。

- ・それから、ピザをやりたいというと、ピザは建物の外に窯を造ったらだめよと。それは体制として、造る分にはいいよとかね。県だったら大丈夫なのに市はだめよとか、いろいろです。結構事務によっていろいろばらつきがあって、これはある程度しょうがないかなと思うのですけれど、そういうことに当初は一番悩まされた。
- ・規制については、放牧はいいのですけれど、放牧して、矛盾しているところもあるんです。堆肥を外へ出して雨が降ったらだめ。でも、放牧で牛のふんが川に流れていくのは、それほど規制がなくて、矛盾していてよく分からないところがあるのだけれど、それはいいみたいですね。確かに規制は非常にちぐはぐなところがあるなというのが実感です。

発言者：鈴木 一郎 （全日畜）

- ・建築基準法と消防法については、かなり以前、農水省から当時の建設省、今の国交省の担当者に、畜舎をもう少し簡略にして基準を弱くしてという申し入れを何回も何回も行っていた時期があります。
- ・そのときに、国からこうなさいという基準はあるのですが、それを認める・認めないという認可については、市町村なり県にいる認可する人です。建築主事の方がおられて、その人が、例えばどれだけ安全率を見るかの判断によるので、それに対してまで国が言うことはできないと、建設省の担当者から言われたことがあります。
- ・そのときに、他のところで同じような事例があって、そちらで認められているのであれば、こちらでも認めてくださいというようなことを出していけば 消防法にしても、建築基準法にしても、基準はクリアしているので、ただその人が心配で認可を出さないだけですから、ほかの事例を見つけてきてそれを提示することによって通ることも結構あります。

◆牛マルキン事業の発動条件について

発言者：藤井 照雄 氏 （山口県配合飼料価格安定基金協会）

飼料価格が高騰して配合飼料の補填事業は、急激な高騰のときの対応として補填する

のが本来の形ですから、今高止まりになった場合は、牛マルキンがきちんと補完すべきです。何で出ないかという、雌牛は対象にならないというか、統計上、雌は入らないというのですが、牛マルキン事業で雌牛が入らない理由は。

発言者：石原 哲雄 氏（事業推進委員会 委員長 畜産技術協会 会長）



・多分雌の生産費調査をやっていないのではないかと思います。ですから、統計がないので、基準になる生産量を出せないということ。販売価格は分かりますよね。当然販売しているので、どこの地域のものを取ってもいいのですけれど、そこで生産されるものの生産費が十分数が集まっていないのかなという気がします。

◆推進委員からの質問と感想

司会（松原）

事業推進委員から質問、感想等をお伺いしたいと思います。

発言者：川村 治朗 氏（事業推進委員 千葉県配合飼料価格安定基金協会 常務理事）

・危機に直面したときに、地元はいろいろな面で大事なのではないかと思います。地元の市町村、市町村や地域の住民、あるいは耕種農家も含めて、日頃、連携をうまく取られているのかどうか、3名の方にお伺いしたい。



・松永さんに、発表の中で、危機を想定した経営をする中で、金融機関の対策と体質とおっしゃっていましたが、それは生産技術の向上を指しているのかどうか。体質を強化するというのであれば、何を心がけられているのか。教えていただきたい。

・山上さんに、新しい孵卵機がすばらしい機械で、孵化したひなの体長が長くなるという話がありました。孵卵期間が21日間。セッターに入れておいて、その後ハッチャーで孵化させるのが一般的だと思うのですが、その中で何か違うことが起きているのかどうか。それで温度も決めていますし、転卵も決めていますし、湿度も決めている

中で今までやられていると思います。オランダの機械は、特別にそういう能力があるのかどうなのか。

発言者：松永 和平 氏 （株式会社松永牧場）

- ・危機に直面した場合も、危機に面していなくても、地元対応は相当、畜産をやっている以上はきちんとしていかないと無理だと思うんです。例えば堆肥1つの処理の仕方にしても、地元が納得する政策をやっていないといけない。
- ・特に、今回のような飼料高になると、WCS の大幅な増産をお願いしたい、あるいは飼料米のお願い。それから、キューサイというケールを作る会社があるのですが、私のところは大体 3,200 トンの堆肥を供給して、2,300 トンのケールの搾りかすをいつももらっているんです。それは繁殖牛にとってはすごくいい餌になるので、そういう動きは常にやって、地域と一緒にやってやるような体制を取っていないと、大型畜産は難しくなると思います。
- ・体質についてですが、肥育農家は特別体質があるんです。特に、見栄張りが強いということ。それから、島根県にはこういうことわざがあるんです。「名人十年もたず」。結局名人を取った人は 10 年以内につぶれますよということわざがあるくらい、肥育農家は何年も続く農家は少ないねということが現状なんです。だから、自分たちは経営としての牛飼いなんだ。肉牛生産のための産業だと。そういう自覚を持たない人は、危機の前にもつぶれると。
- ・一番計算高いのは、採卵鶏、ブロイラー鶏で、市場効率などをとてもよく考えますが、肥育農家はそういうことを考える人はまずいないですから。しかも、酪農家はいろいろ考えて情報交換もしますし、乳飼率を上げるためにはどうしたらいいかもやりますが、肥育農家は、ただ1点の共励会しか思わない人があまりにも多いので、やはり体質を考えていかないと、肥育農家の継続性は難しくなると思っています。本当は経営対策もきちんとやっていくべきなんですよ。その前に現場の対策が必要だなと思いますね。

発言者：山上 祐一郎 氏 （株式会社福田種鶏場）

- ・地元との連携については、このたびの新しい孵卵場の工事も順風満帆だったわけではなく、コロナ禍による国境閉鎖によって、当社の工事を指導する外国人技術者が入国で

きなくなってしまう、6か月工事を中断せざるをえませんでした。その結果、事業の完了も遅れて農林水産省さんをはじめ皆様に大変御迷惑をおかけしたのですが、国も地方も行政の皆様においては、必要なときに必要な方があらわれて、必要なアドバイスをいただけたなど大変感謝しているところです。

- ・岡山県には、岡山県孵卵協会をはじめ、県養鶏協会、県畜産協会、県チキン振興会といった業界団体がしっかりと組織されています。そうした業界団体を通して、常日頃から県の畜産家の方々や管轄行政の方々と交流があることが、いざという時に役立ったなどと思います。もちろん鳥インフルエンザのときもそうでしょうし、当社としてもそうした地域とのつながりは重要視しています。
- ・ひよこの体長に関して技術的に説明しますと、孵卵の21日間の工程は、おおざっぱに言えば、種卵の卵黄を身体に変えていく工程だとも言えます。その21日間の間、鶏胚を取り巻く孵卵環境を、常に最適な温度、湿度、二酸化炭素濃度にしてやることで、卵黄の変換率が高まり、身体がより大きくなるというロジックです。
- ・旧式の孵卵機では、その孵卵環境のぶれが大きかったのですが、最新の技術で、センサーが測った条件をもとに、ソフトウェアで加温や冷却やエアフローを制御して、ぴたっと卵が求めている環境を与え続けることができれば、より身体の大きなひよこが産まれるということです。その際、遺残卵黄は小さくなります。要するに卵黄が身体にうまく変換できるひよこづくり。それが新しい機械だとより高い精度でできるようなることです。

発言者：久保 正彦 氏 （株式会社久保ファーム）

- ・危機管理という言葉は、私はあまり考えたことがないのですが、コロナのときに余乳が出てしまって、牛乳が売れなくなって、牧場の近くにドライブスルーがあるので、ほとんどの牛乳をパックで詰めて、パックで3本1,000円まではいかないですけど、牛乳を1,000円で売りますと言ったときに、2日間で売れたということがあります。
- ・これは、長い間牛乳メーカーをやっていて、地元で愛されていることもあるだろうと思うのですが、皆が応援してくださっているということ。結局地元と有機的につながっているなど感じたのが私の実感です。
- ・ほとんどの牛乳が2日間で売れたということや、病院の看護師さんに無償で提供するとテレビに取り上げられて、平生からそういうことを常にやっていると、周りが助けて

くれることもあるのだろうなと思いました。

発言者：石原 哲雄 氏 （事業推進委員会 委員長）

- ・本日は大変貴重なお話をありがとうございました。またこれまでの経営努力に対しまして敬意を表したいと思います。
- ・私が全体を通じて感じたことは、経営危機への対応を皆さんしっかりやられて、そこで学んだことを紹介していただきました。優良事例集を作ることには大変参考になると思うのですが、問題は、今危機にある人が生き延びるために何が必要なのかと。その辺のところ、制度や国へのお願い、そういうものは多分たくさんあるだろうと。なかなかストレートに書けないので、ここに1～2行書いていただいていると思うのですが、少し後押しすれば、ここで経営をやめざるを得ないところがまた続けられる。そのためのポイントのようなもの。この会、ここでまとめられると思っはいませんけれど、優良事例集を作るときに、少しその辺のところも意識して整理されたらなど。
- ・優良事例としてはいいですよ。これは間違いなく立派な事例として参考になると思います。それを読んだ人が、そこから今度こういう危機が来たときに2度と脱落しないように頑張ろうという参考資料としてはいいのですが、今ここでもうやめようかな、飼料が高いのでこれ以上持ちこたえられない。それをどうしたらいいのか、視点としてあれば、そういう人にとっても参考になるような事例集になるのかなと思っはいませす。危機を脱するために、危機を想定した対応を常にやっていくことが多分重要だと思っはいませすね。そこをまずやりながらしっかり対応していくことが重要だと思っはいませす。
- ・それから、最近のアニマルウェルフェアの話が出ましたけれど、国が指針を作って、国の責任が重くなったわけですね。それまで畜産技術協会がアニマルウェルフェアの指針を作って、皆さんの意見を踏まえながら、日本の国に合った、日本の業者が対応可能なものを作ったのですが、国は WOAH (World Organisation for Animal Health: 国際獣疫事務局) コードを基に、いろいろな団体の方、個人の方からの批判に対しても耐えられるように作ったものですから、なかなか厳しいものではある。ただ、そういう中でも、今すぐやらなければいけないことと、これから先何年かしてやらなければいけないことをしっかり分けているので、その辺も考えながら対応すればいいのかなと。

- ・意見は常に国に出して全く問題ないですから、やはりもう少し日本に合った対応をしっかりとやりよということは出していいと思います。特に、アニマルウェルフェアに対する愛護団体の過剰な行動は、どこかである程度規制をしないと、正しい産業の育成にはならないのではないかなと思います。
- ・生産コストが上がったとき、その価格をどういうふうに移嫁するか。今、国でも検討が始まっていますが、なかなか難しいですね。コストが上がって需給が逼迫していれば、それを容易に認めてもらえるような素地はあるのですが、今回のように生産コストが上がり、しかし、需要が伸びないということになれば、本当は価格を下げなければいけないですね。価格を下げないと、需給がうまくいかない。伸ばせない。そういう相反するところがあるのですが、そこは多分議論をしても結論が出ないところだと思います。
- ・やはり国が制度的に所得補償的なもの。マルキンもその1つですが、そういうものをしっかりと充実させて、一定のところは生産者に対して補助しながら、生産加工業者、小売業者が適正な価格で売れるように、国が根っこのところで対策をする。そういうことが、今一番効果のある対策かなと思っています。
- ・皆さんのように業界の団体の人は意見を言いやすいと思います。我々は国から補助金をたくさんもらっているのだから、なかなか国にそういうことは直接的に言いづらいのですが、皆さんが必要な要求に対しては、我々応援することは可能です。大いにやったらどうかと。私の本当の感想だけになってしまいました。これで終わりたいと思います。

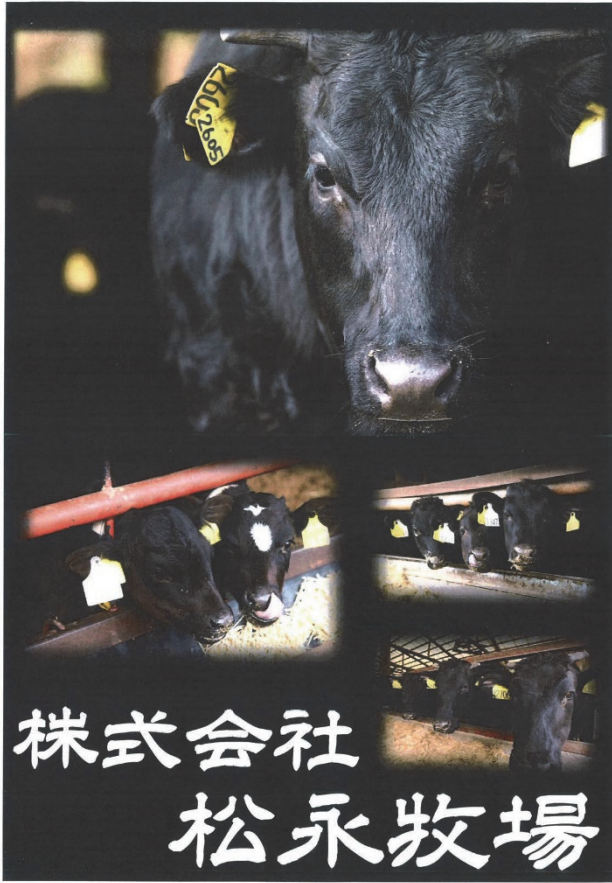
司会（松原）

- ・たくさんの貴重な意見、たくさんの御回答をありがとうございました。ここでまとめさせていただきます。
- ・皆さんのお話の中で共通していることは、日常で危機を想定して経営していくということ。危機が来たら、ゆとりを持って対応することが重要という気がしました。
- ・松永さんのお話を伺っていると、7人でできることを11人でやっている。これは余裕があるということですね。要は土俵で経営するのではなく、土俵の真ん中で経営しろというような話がありますが、そういった日常的な経営をしっかりとやっていくことですね。金融機関とも常にコミュニケーションしながら借入枠を確保する。

- この話は、BCP (Business Continuity Plan) という事業継続計画に当たるのですが、松永さんの話を聞いて、BCP を実践しておられる事例を初めて伺いました。農水省が旗を振っていますけれど、こういう観点から余裕のある経営を常に目指して行って、畜産が好きな従業員、長く勤めていただける従業員を育成する。あらゆる面で事業の継続という観点から経営していければいいのではないかなと。そういう優良事例を今回は発表していただいたと思います。



発表者、事業推進委員、開催県他の皆さん



株式会社 松永牧場

株式会社松永牧場

所在地

【本社】 肥育牧場 島根県益田市種村町イ1780番地1 ☎ 0856-27-1341
 【分場】 繁殖牧場 島根県益田市種村町イ1984番地1 ☎ 0856-27-1970

関連会社

農事生産法人 ㈱メイプル牧場 島根県益田市黒周町1246番地3 ☎ 0856-29-8050
 株式会社 石見ウッドリサイクル 島根県益田市種村町イ1780番地1 ☎ 0856-27-1112
 農事生産法人 ㈱萩牧場 山口県萩市大字中小川2750番地1 ☎ 08387-4-0779
 株式会社 ソラーファーム 島根県益田市種村町イ1780-1
 株式会社 楓ジェラート 島根県浜田市三隅町向野田721-7 ☎ 0855-32-5200
 株式会社 浜田メイプル牧場 島根県浜田市三隅町井野松1342番地

会社設立

昭和48年8月29日

資本金

株式会社 松永牧場 1,194万円
 株式会社 メイプル牧場 5,010万円
 株式会社 石見ウッドリサイクル 3,000万円
 株式会社 萩牧場 1,000万円
 株式会社 ソラーファーム 5,050万円
 株式会社 楓ジェラート 350万円
 株式会社 浜田メイプル牧場 6,250万円

業務内容

肉牛の繁殖・肥育・牛糞堆肥の製造、販売
 飼料作物の生産・食品残渣の飼料再生

売上実績

(株)松永牧場・・・R4.1.1～R4.12.31 3,354,689,435円

従業員数

7名

経営の特徴

- 大規模経営を生かし、関連企業と連携した経営
 - 肥育畜牛の確保（メイプル牧場）、予防衛生（大動物診療所）
 - 数量安定確保（石見ウッドリサイクル、安野産業）
- 未利用資源の有効活用
 - おからを利用した低コスト飼料生産と地域内供給
 - 地域の集落営農組織との堆肥・糞糞交換
 - 河川敷下草の有効利用
- JAS認証牛の出荷
 - 生産情報公表牛肉 JASによる、消費者の安全・安心ニーズへの対応

法人の沿革

年次	経営の変化	(単位:頭)				
		乳用種	繁殖	F1	FIX	黒毛和種 合計
昭和48年	8月29日法人登録をする	184				184
昭和49年	島根県農業公社牧場として開発を進める	335				335
昭和50年	草地 1.9ha 柵障物 3.150m 牛舎 372m完成	295				295
昭和51年	草地 7.7ha 雑用水、電気、牛舎等完成	416				416
昭和52年	牧道1.882m完成 公社牧場事業終了	467				467
昭和53年	牛舎2棟建設	512				512
昭和54年	堆肥舎を建設 牛肉価格の高騰により赤字解消	531				531
昭和55年	牛舎3棟建設	659				659
昭和56年		702				702
昭和57年	牛舎1棟建設	685				685
昭和58年	山除水害による被害を受ける 堆肥板を作る	683	21			704
昭和59年	代表者がかわる	703	38			739
	理地区有機物循環利用組合を結成					
	地域畜産総合対策事業を導入					
昭和60年	堆肥の販売に取りかかる	642	82			704
昭和61年	畜産振興資金で200頭牛舎を建てる	790	98		10	888
昭和62年	堆肥舎を建設、自動堆肥攪拌機を入れる	753	203		45	1001
昭和63年	繁殖を開始 牛舎3棟建設	595	299			894
平成元年	FX、ET合わせて57頭出産	501	454	52	70	1077
平成2年	ハンカサイロ、堆肥板建設	346	490	118	23	977
平成3年	スタンプ式牛舎建設 全自動堆肥袋詰機購入	293	481	163	13	950
	台風19号の被害を受ける					
平成4年	法人設立20周年を迎える 和牛の導入開始	86	756	199	39	1080
平成5年	石見県畜産振興工事を請け負う 日本農業賞を受ける		883	215	180	1258
	堆肥部門にバレット積口導入					
	乳用種肥育より完全撤退					
平成6年	猛暑が続く 牛舎増設		931	246	279	1456
平成7年	除角施設を導入し全頭除角に入る 島根県農業公社牧場事業を取り入れ規模拡大に入る		1214	237	342	1793
	血中ビタミン分析開始					
平成8年	日本全国 狂牛病、O-157による消費に影響 牛舎増設(200頭)		1332	262	290	1904
平成9年	全国肉牛共進会 交雑の部に最優秀賞を授賞		1561	295	286	2122
平成10年	集団哺育施設導入 牛舎2棟増設 堆肥舎増設		1677	335	276	2288
平成11年	体外授精卵産子枝肉共助会にて最優秀賞を受賞		1827	359	291	2477
平成12年	豊かな畜産の里作りで畜産局長賞を受ける (株)石見ウッドリサイクルを設立する		1760	402	367	2529
平成13年	3年連続体外授精卵産子枝肉共助会にて最優秀賞を受賞 西川賞受賞 9月30日日本で発生	242	1606	413	384	2845
平成14年	BOO議の繁殖一貫牧場の建設に入る	414	1838	497	497	3244
平成15年	ISO14001:1996取得	501	2108	483	689	3759
平成16年	生産情報公表牛肉JAS取得	658	2008	483	1002	4151
平成17年	生産情報公表牛肉JAS出荷開始。㈱メイプル牧場設立	5	706	2178	374	4836
平成18年	農林漁業金融公庫より「輝く経営大賞」を受賞	18	736	2235	325	4991
平成19年	全国優良畜産経営管理技術発表会 最優秀賞を受賞		728	2281	230	4922
平成20年	食品残渣飼料化プラント完成 内閣総理大臣賞を受賞		788	2615	106	5299
平成21年	畜産大賞特別賞を受賞	1	705	2659	12	5406
平成22年	FOOD ACTION NIPPON7「2009製造・流通・システム部門優秀賞受賞	5	781	2772	2	5900
平成23年	「安全で美味しい畜産の発展と畜産」・「東宮親生産情報提供食品事業者登録」両賞		791	3237	2	6022
平成24年	㈱萩牧場・㈱ソラーファーム 設立		801	3657		6458
平成25年	11月10日組織変更「株式会社」へ		833	3481		6842
平成26年	㈱萩牧場 出荷開始 ㈱メイプル牧場規模拡大 1200頭搾乳へ	1	796	3408		7020
平成27年	全国肉用牛枝肉共助会 名誉賞を受賞		789	3385		7089
平成28年	繁殖一貫を1200頭まで拡大		809	3327		7132
平成29年	㈱浜田メイプル牧場 設立		1072	3271	1	7316
平成30年	㈱浜田メイプル牧場 第1期工事完成		1177	3293		7571
平成31年	㈱浜田メイプル牧場 第2期工事完成 搾乳開始		1213	3229		7644
令和2年	全国肉用牛枝肉共助会 名誉賞を受賞		1246	3271		7854
令和3年	全国肉用牛枝肉共助会 最優秀賞を受賞		1227	3088		7794
令和4年	全国肉用牛枝肉共助会 名誉賞を受賞		1217	2883		7663
令和5年	堆肥舎新築 令和5年6月末現在		1224	2708		7603

2023年 9月30日 現在の頭数情報

株式会社 松永牧場			
本場		全体	
和牛	2778 頭	和牛	4927 頭
F1	2706 頭	F1	2706 頭
分場		総頭数	
和牛	2149 頭	7633 頭	

株式会社 メイプル牧場		株式会社 萩牧場		株式会社 浜田メイプル牧場	
和牛	422 頭 (内繁殖 196 頭)	和牛	958 頭	和牛	404 頭 (内繁殖 180 頭)
F1	209 頭			F1	104 頭
ホルstein	1269 頭 (内経産 1027 頭)	F1	599 頭	ホルstein	898 頭 (内経産 774 頭)
ホルstein	0 頭			ホルstein	0 頭
総頭数	1900 頭	総頭数	1557 頭	総頭数	1406 頭

株式会社 松永牧場



肉の美味しさ
 美味しい肉には、オレイン酸、リノール酸などの「不飽和脂肪酸」が多く含まれています。不飽和脂肪酸は、肉を美味しくさせるだけでなく体に良い脂肪と言われています。また「飽和脂肪酸」を多く含む肉は、あまり美味しくなく体に悪い脂肪と言われています。では「不飽和脂肪酸」・「飽和脂肪酸」に影響する要因は？
 ①品種 ②性別 ③血統 ④飼料 ⑤肥育期間 ⑥環境 などです。

松永牧場では、これらの研究を重ね、独自で開発した飼料により「美味しくなる血統の牛」を育成し、最高の環境の中で生産された牛肉を皆様にお届けしています。

肥育牧場

飼養頭数

繁殖牛 … 1200頭
 肥育牛 … 6450頭

- 2003年 9月11日 ISO14001認証
- 2004年 8月 2日 生産情報公表牛乳JAS認証
- 2008年11月30日 内閣総理大臣賞受賞
- 2015年10月30日 全国肉用牛技術大会最優秀賞受賞
- 2016年 4月15日 横浜食肉市場「17」最優秀賞受賞
- 2020年10月27日 全国肉用牛技術大会最優秀賞受賞
- 2021年10月28日 全国肉用牛技術大会最優秀賞受賞
- 2022年10月28日 全国肉用牛技術大会最優秀賞受賞

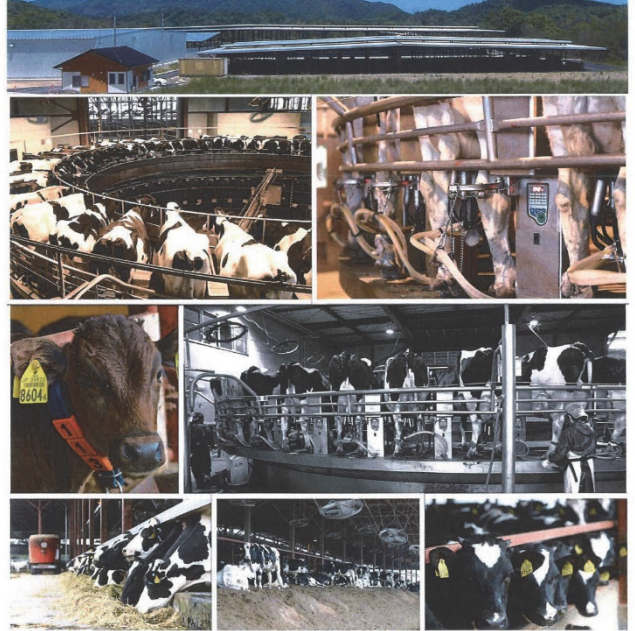


繁殖牧場

生産履歴の開示は松永牧場のHPから飼養管理情報をクリックして店内開示の牛のパスポートNo.10桁を操作して下さい。
 松永牧場 <https://www.notonogoya.com>

株式会社 メイプル牧場

メイプル牧場は
 子供たちに飲んでもらいたい牛乳
 をつくっています。



株式会社 萩牧場

平成24年2月14日 株式会社萩牧場が誕生しました。株式会社松永牧場の県外進出第1号として山口県萩市において1700頭体制でスタートしました。平成26年7月、SGSジャパン株式会社よりJASの認定を受け、松永牧場グループの一員としてJAS牛の出荷を始めています。恵まれた環境の中で品質本位の循環型農業を実践します。



株式会社 浜田メイプル牧場





孵卵場の新築による危機克服 ～創業90年目の本拠地移転～



令和5年11月16日

株式会社福田種鶏場
代表取締役 山上祐一郎

(株)福田種鶏場

所在地	岡山市東区瀬戸町
主業	ブロイラー種鶏孵卵業
創業	昭和6年（1931年）
創業者	山上茂吉
社員数	84人
取扱品種	チャンキー種
出荷羽数	2,700万羽/年
出荷先	中国・四国・近畿 東海・北部九州
売上高	19.6億円



創業地（岡山市福田）

1931年 祖業は育種改良 当時は卵用鶏のみ



1951年 国内初のブロイラー専用種を作出



1967年 英国産チャンキーブロイラーを国内初導入(株)日本チャンキーを設立



経営危機

□ 孵卵舎の老朽化。昭和22年築の木造瓦葺き。住居専用地域。



経営への影響

□ 台風や豪雨で被災（浸水、停電）



□ 生産性向上に限界



危機への対応

□ 新孵卵場の建設 グリーンフィールド・プロジェクト（未利用地の新規開発）



危機への対応

□ 2020年12月新孵卵場を開業



危機から学んだこと

□ 動物生産性の向上

- 商品化率 従来比 **+1.6%**
ex) 年間3000万卵→年間+48万羽
- 体長の長いヒナ
従来18.8cm→20.0cm **+1.2cm**
- 肥育時の飼料要求率が改善
従来比 **▲2.2%**
ex) 年間2700万羽→年間▲約3,000ト




危機から学んだこと

□ 新しい設備で労働生産性が向上（毎時3万羽処理）



よい雛づくりを通して

サステナブルな鶏肉生産を目指します

 (株)福田種鶏場

〔県民局だより〕

最新ふ卵施設で愛情を込めて「よい雛」を増産していきます！ ～株式会社福田種鶏場（岡山市）～

備前県民局農畜産物生産課

1 はじめに

昨年11月、株式会社福田種鶏場（山上祐一郎代表取締役社長）が「強い農業・担い手づくり総合支援交付金」を活用して整備した最新鋭ふ卵施設が、岡山市東区瀬戸町に完成しました。

そこで今回は、同社が整備した国内初の世界標準ふ卵施設について紹介します。

2 取組の経緯

同社は、赤磐市でブロイラーの親世代にあたる「ブロイラー種鶏」を約15万羽飼育し種卵を生産すると同時に、岡山市南区の同社に隣接するふ卵施設でふ化させて、初生ひな（ヒヨコ）をブロイラー農場に出荷しています。

昨年は、中四国、近畿、東海地方の農場に向け約2500万羽を出荷し、岡山県内の約8割、中四国では約2割のシェアを占めています。

近年、国産鶏肉需要は、健康志向の高まりや手頃な価格などから増加傾向にあるため、ブロイラー農場からの同社への初生ひなの需要も高まっています。旧ふ卵施設では立地場所が狭く、旧ふ卵施設の一部を県改革・規模拡大が難しく、生産の一部を県外の協力業者に委託していました。

そこで、高まる需要に対応するとともに、作業効率化及び生産性向上を図り、さらなるコスト削減を実現するため、国内初となるオランダ製最新設備を備えたふ卵施設（約4,000㎡）を移転新設することとしました。

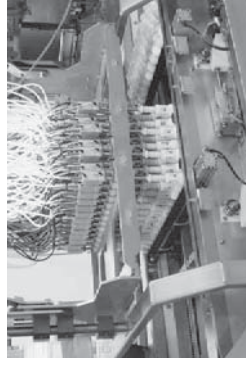
3 施設・機械

ふ卵施設に運ばれてきた種卵は、まず規格等で選別後、ふ卵機に入卵されます。

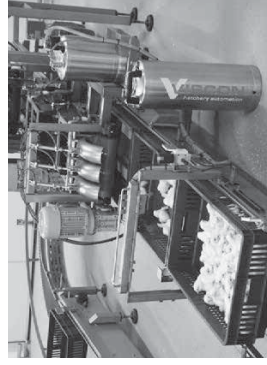
とで、作業効率が高められています。特に、ふ化前の卵は、検卵機・ワクチン接種機を経て発生機に運ばれますが、今回導入された機械は、全ての卵を心拍センサーで判別後、変性卵や無精卵などを取り除き、発育している卵だけにワクチンを接種することが可能であるため、衛生管理とコスト削減の両立が期待されます。



【右から、検卵機、ワクチン接種機、移卵機】



【ワクチン接種機内部】



【チックカウンター】

また、上記の工程を経て生産された初生ひなを農場に出荷されるまでの間、最適な環境で保管可能な、ひな専用の保管室の「チックストレージルーム」も国内で初めて導入されました。



【生産された初生ひな（ヒヨコ）】



【チックストレージルーム】

4 取組の効果

11月上旬の竣工後、直ちに入卵を開始し、12月中旬に無事、初生ひなが農場に出荷されました。

同社、代表取締役の山上祐一郎氏に完成した施設の感想を聞くと「当社にとっても、ふ卵施設の新築・規模拡大は先願でした。国内はもとより世界でも、最先端の孵卵設備ができてきたと自負しております。本施設を活用し、より強健かつ安価なひなを安定的に供給し、日本の養鶏事業に奉仕したい。」とうれしそうに語ってくれました。

5 さいごに

同社は、昭和6年（1931年）の創業以来、社是として「よい雛」の一言のみを掲げ、高品質な初生ひなの供給に努めてこられました。

今後も施設整備による事業効果を最大限に発揮して頂き、同社がさらに成長・発展し、「よい雛」が増産されることで、県産鶏肉の生産性向上と安定供給につながっていくことを期待しています。

事例紹介の個票

[生産者用]

事例NO		事例テーマ	酪農と生乳の加工・販売及び食育教育を手掛ける多角化経営による危機克服	経営体の名称	(株)久保アグリファーム 代表取締役 久保正彦
スナップ等	 <p>農場全景</p>	 <p>牛舎</p>	 <p>ジェラートなどの加工・販売ショップ</p>	 <p>体験乳搾り</p>	
経営の概況	<p>(1)所在地 (2)経営形態 (3)経営の特徴</p> <p>(4)経営従事者数 (5)飼養頭数規模 (6)年間生乳生産量 (7)多角化部門の販売</p>	<p>〒738-0513 広島県広島市佐伯区湯来町大字白砂1207番地2</p> <p>法人経営による酪農、生乳の加工・販売、食育教育に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広島市佐伯区の地に1941年に創始者の故・久保政夫が八丈島から乳牛23頭を連れて雑木とクマザサに覆われた砂谷村に帰郷して自ら開墾したのが農場の歴史が始まり。先代は、旧湯来町や周辺の農家に働きかけをし、多くの酪農家を育成して、久保農場の隣接地に(株)砂谷乳業を起し、牛乳の製造販売に取り組んだ。 ・消費者とのふれあいを強めるため、農場内に農場直営のジェラートやチーズ製造施設を作り、現在は、息子(長男)の久保尚彦が中心となり運営している。砂谷乳業では、4戸の酪農家と(株)久保アグリファームで搾った生乳を製品化。 ・国産飼料給与にこだわり、草をお乳に換える生産理念(土・草・牛)を継承し続ける事が美味しいジェラートの基本理念に、低温殺菌牛乳を牧場内にあるジェラート工房(アルトピアノ)で加工・販売している。 ・農場は、15ヘクタールの土地を有し、国産飼料給与にこだわり、粗飼料自給率は70%。乳牛に給与する牧草の90%を自家生産でまかなっている。 ・学校関係の課外授業対応して、牧場での搾乳体験、バター作りなどで食育教育にも取り組む。 ・生乳販売では、宅配方式を中心に「地産地消」の事業にも取り組んでいる。 ・広島市内から1時間内のところに位置し、景観もよく、子供たちの食育教育に最適な環境。 ・常勤労働力8人(農場管理4人、加工・販売部門4人) 長男が経営する砂谷乳業の要員は別。 ・乳牛の飼養頭数は、経産牛70頭、育成・子牛50頭 計120頭。 ・草地12ha(うち放牧地2ha)。 ・生乳の生産量は550~600t/年。 ・生乳生産量は550t/年。指定団体からの購入と自家生産で1日約4tを工場で生乳を処理。 ・ジェラードとチーズで約2t/年を販売、ジェラードは9~10万人/年の顧客がある。 ・牛乳の販売先の一つに保育園があり、定期的に納入して園児が飲んでいる。 			
事例紹介のポイント等	<p>① 畜産経営危機の種類(経営危機に直面し、その引き金となった主な要因)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然環境要因 長雨による収穫適期の損失、播種後に圃場の水はけが悪く種子が腐る場所もあった。 ・社会的要因 濃厚飼料の高騰、ぬれ仔価格暴落、エネルギーの高値、為替変動による円安。 <p>② 畜産経営危機の経営への影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ・購入飼料の影響は著しく1.4倍近くも高騰し乳飼比70%近くになっている。 ・生産者乳価が昨年、今年と実施されたが、為替の影響も利益増の実感がない。 ・牧草の種子も1.5倍近く、肥料代2倍近く高騰し粗飼料生産コストも増加。 ・仔牛の価格暴落 F1の価格も以前は10万円前後で推移していたが、家畜商の手数料・市場手数料で赤字の状態。 <p>③ 畜産経営危機への対応状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自給飼料の増産 土壌分析の実施、土壌の硬盤をサブソイラによる心土破碎で透・排水性の改善より種子の根腐れ収量増加を図る。 ・放牧地の拡大(1.5ha)で 育成牛の生産コストを削減。 ・イチゴ農園を併設し新たな収益を生み出す。 ・ジェラート店の周辺整備を実施、心地よい非日常空間の提供(情緒的価値の創出) <p>④ 経営危機から学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何時の時代も、環境に対応できなければ事業は生き残れない事を実感した。 <p>⑤ 持続的な畜産物生産(SDGs)の在り方に対する意識について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去、堆肥の完熟が難し実情があったが、飛行場周辺の草を水分調整に使用し改善された。 ・放牧酪農を目標に、頭数削減と利益確保の課題に取り組む(ジェラート・イチゴ農園・市民参加型農園) <p>⑥ 国、県等の施策への要望</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国策として農業の位置付けを議論する時代の到来だと思う。 				



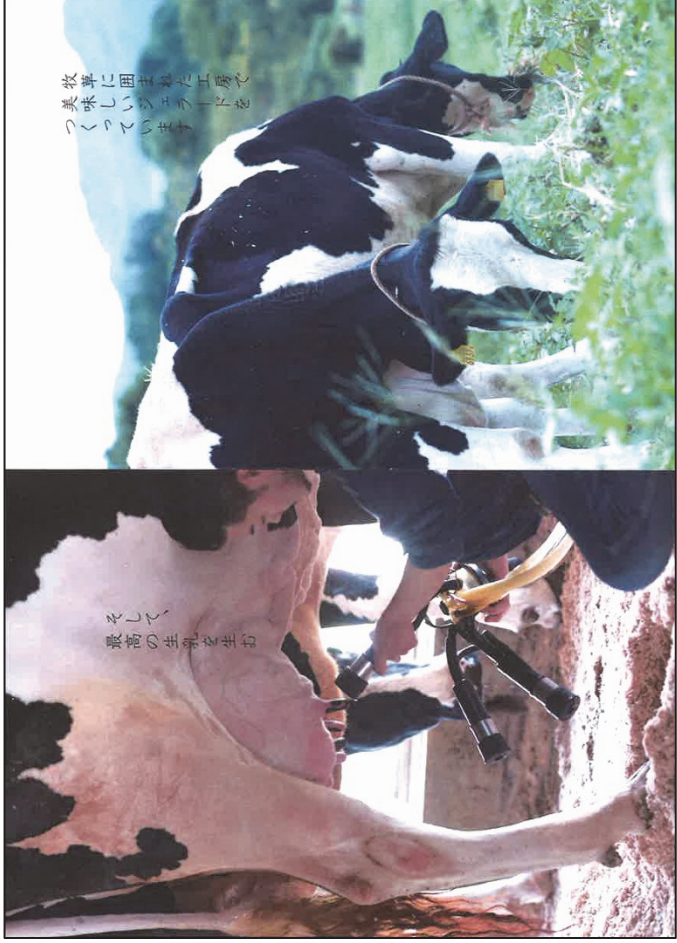
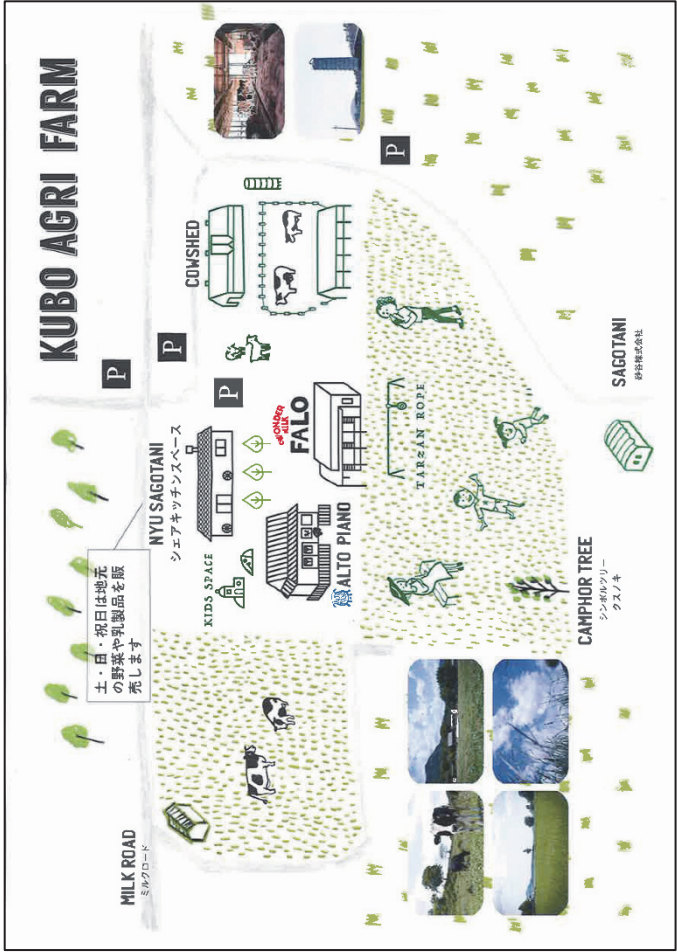
〆 HP
 TEL 0829-86-0337
 OPEN 11:00-17:00
 CLOSE 火曜日
 〒798-0912
 広島市佐伯区湯来町白砂 1207-2

久保正彦の低温殺菌牛乳

自家牧草を食べて育った健康な牛から搾りました。生乳は加熱すると風味が変わります。低温殺菌はそれを最小限に抑える本場ヨーロッパの殺菌方法です。

チーズ

朝、牛舎に搾りたての乳を取りに行くところから始まるチーズ作り。
牧場の乳の味をそのまま味わうフレッシュなチーズをご用意しております。



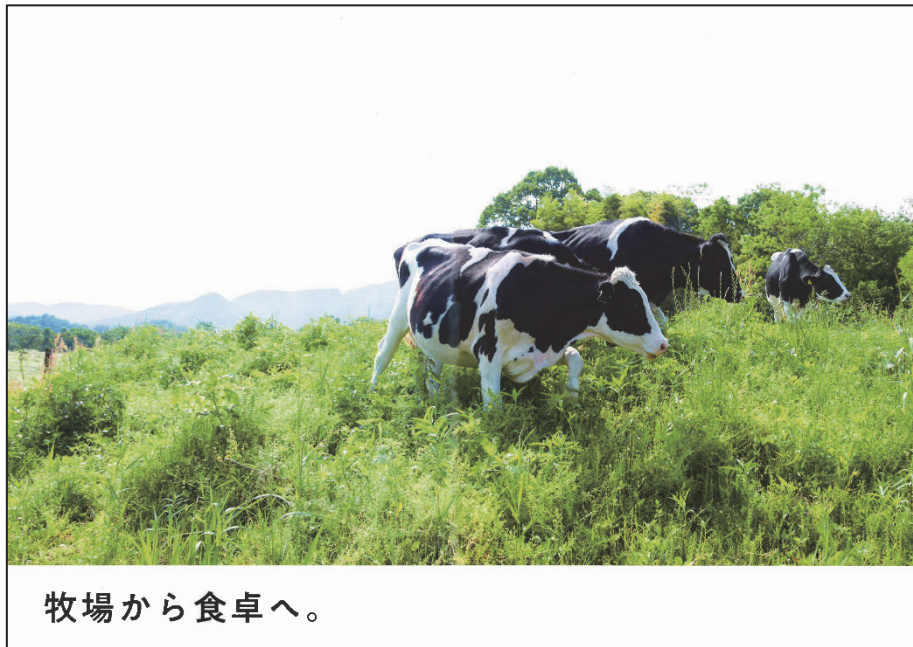
広島 湯来町

サゴタニ牧農

SAGOTANI FARMER

宅配サービスガイド

週1回~
配達手数料
無料



牧場から食卓へ。

宅配商品ラインナップ

ご注文・お問い合わせ ☎0120-5959-39

ご注文時期 月～金 9:00-17:00

注文番号 商品の詳細、ご注文内容、お問い合わせ先、お問い合わせ先

商品名

85°C20分殺菌牛乳

香かな風味とコクが特徴です。

4月～9月 10月～3月

季節によって切り替わる二つのパッケージ

注文番号 **0800** 500ml
はるとなつ牛乳
あきとふゆ牛乳

注文番号 **0900** 500ml
はるとなつ牛乳
あきとふゆ牛乳

香から区 ▶ サラッとスッキリした味わい
秋から冬 ▶ 濃厚でコクのある味わい

牛の食べる飼料は季節によって変わるため、それぞれの味わいが楽しめます。パッケージを詳しくは牛乳の家の紙の裏面をご覧ください。

65°C30分殺菌牛乳

日本で5%しか作られていない「低温殺菌法」を採用し、搾り立てに近い味わいです。

一部の酪農家 久保正彦の庄乳のみを使用した牛乳

注文番号 **1200** 500ml
久保正彦の低温殺菌牛乳

注文番号 **1300** 500ml
久保正彦の低温殺菌牛乳

注文番号 **1650** 1000ml
砂谷低脂肪

飲みきり小瓶タイプ

注文番号 **0030** 200ml
サゴタニ牛乳瓶

注文番号 **0230** 200ml
サゴタニコーヒ一瓶

牛乳を常々がらの瓶でお届けします。中身は「はるとなつ牛乳」および「あきとふゆ牛乳」と同様です。

自然でドリップしたコーヒーと殺菌牛乳の絶妙なハーモニー。

牛乳の殺菌温度をご存知ですか？

市場に出回っている牛乳の多くは「超高温瞬間殺菌(120°C～130°C 2～3秒)」されたものです。サゴタニ牧農の牛乳は低温で時間をかけて殺菌しています。

なぜ低い温度で殺菌するのでしょうか？

- その理由1 いい味が立っている
- その理由2 牛乳の質がいいから低い温度で殺菌することができる
- その理由3 くまなく旨みを通じて届ける搾りたてに近い味
- その理由4 細菌の増殖が早い

ご注文・お問い合わせ ☎0120-5959-39 営業時間 月～金 9:00-17:00

ご注文番号
商品名

類似とコクがあり、その割合で
なめらかなヨーグルトです。移動不使用。



注文番号
1720
ヨーグルト
プレーン
500g

お得な
500g入り



注文番号
1700
ヨーグルト
プレーン
110g



注文番号
1710
ヨーグルト
きび糖
110g

きび砂糖を使用した優しい甘さの
スイーツのようなヨーグルトです。



注文番号
1730
のむヨーグルト
加糖
150ml

低脂肪ですが、たっぷりの
濃厚な飲み口です。



注文番号
1740
のむヨーグルト
野いちご
150ml

よくある質問

Q 支払方法は？
A お支払は自動引落でお願いいたします。
毎月月末締めでのご案内させていただきます。

Q 休みたいときはどうすればいいの？
A 3日前までに電話にてご連絡頂けても対応可能です。

Q 商品の追加変更はできるの？
A 可能です。但し数量は残りの場合のみありますので、
早めにご連絡をお願いいたします。

※取り扱い店舗
広島県内、おうち工房、もみじ銀行、
広島県内各店舗、広島県内各店舗、おうち工房

砂谷株式会社

〒738-0513 広島県広島市東区東山1-13-7 番地
電話 0829-86-1009
FAX 0829-86-2704
〒日 9:00-17:00

HP 0120-5959-39
Instagram @sagotani

<https://www.sagotani.net>

サゴタニ牧場とは？



“サゴタニ牧場”は砂谷株式会社が生み出したブランド名です。

砂谷株式会社は、ただ美味しい牛乳作りを目指すだけでなく、食べることの美味や“農”の持つ役割を考え続けることを大切にしています。

創業哲学である「食の営みは命の営みである」という理念を「牧農」という二文字に込めて砂谷株式会社が創り出した言葉です。

宅配のお申込みについて



STEP 1 宅配可能エリアを確認 お住まいの地域が該当しているかご確認ください。

- 広島市内全域 ●廿日市市
- 大竹市 ●府中町

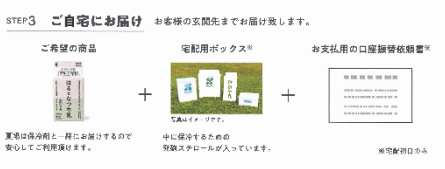
OKなら



STEP 2 お電話にて申込 ご注文・お問合せはお電話にて承ります。

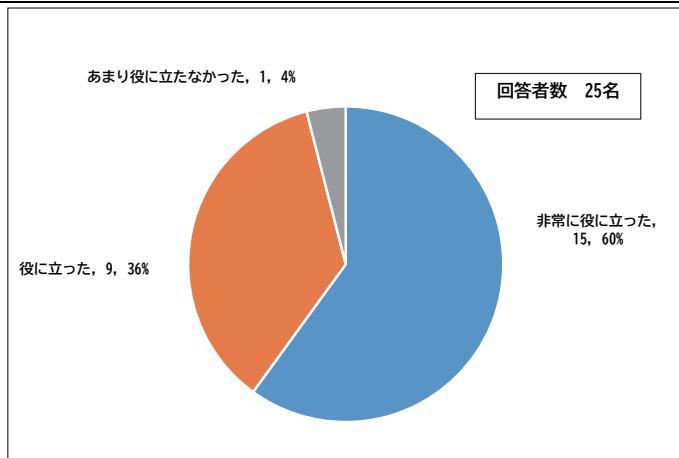
☎0120-5959-39 営業時間 月～金 9:00-17:00

①お客様情報	②宅配曜日と宅配開始日	③商品の	1. 注文番号
・お名前 ・ご住所 ・お電話番号 等	※田・可産です。 エリアによって宅配できる曜日・時間が 異なりますので、お電話にて お問い合わせ下さい。	1. 商品名 2. 商品名 3. 個数	



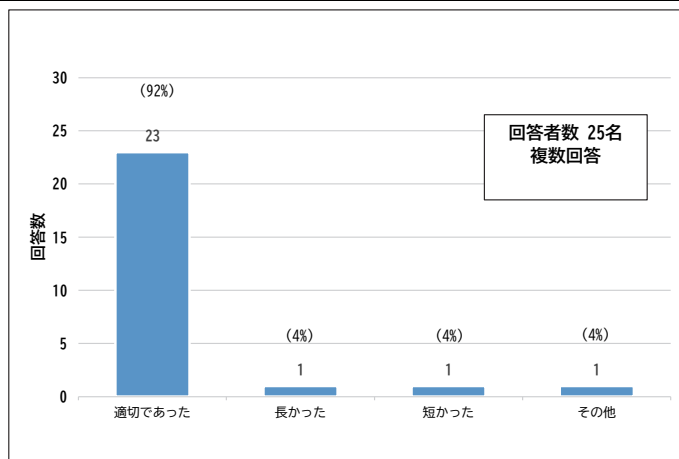
<p>問1 回答者の属性</p> <table border="1"> <caption>問1 回答者の属性</caption> <thead> <tr> <th>属性</th> <th>人数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>飼料メーカー</td> <td>11</td> <td>44%</td> </tr> <tr> <td>畜産団体等</td> <td>10</td> <td>40%</td> </tr> <tr> <td>畜産経営者</td> <td>3</td> <td>12%</td> </tr> <tr> <td>行政機関</td> <td>1</td> <td>4%</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>25</td> <td>100%</td> </tr> </tbody> </table>	属性	人数	割合	飼料メーカー	11	44%	畜産団体等	10	40%	畜産経営者	3	12%	行政機関	1	4%	合計	25	100%	<p>回答者の属性は、「飼料メーカー」が44%、「畜産団体等」が40%、「畜産経営者」が12%であった。また、「その他」の回答が4%あった(行政機関)。</p>
属性	人数	割合																	
飼料メーカー	11	44%																	
畜産団体等	10	40%																	
畜産経営者	3	12%																	
行政機関	1	4%																	
合計	25	100%																	
<p>問2 畜産経営の「畜種」</p> <table border="1"> <caption>問2 畜産経営の「畜種」</caption> <thead> <tr> <th>畜種</th> <th>回答数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>酪農</td> <td>1</td> <td>33%</td> </tr> <tr> <td>肉用牛</td> <td>1</td> <td>33%</td> </tr> <tr> <td>養鶏(ブロイラー)</td> <td>1</td> <td>33%</td> </tr> </tbody> </table>	畜種	回答数	割合	酪農	1	33%	肉用牛	1	33%	養鶏(ブロイラー)	1	33%	<p>前問で、「畜産経営者」と回答した者3名の「畜種」については、「酪農」、「肉用牛」、「養鶏(ブロイラー)」が各々33%であった。複数回答はなかった。</p>						
畜種	回答数	割合																	
酪農	1	33%																	
肉用牛	1	33%																	
養鶏(ブロイラー)	1	33%																	
<p>問3 「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて」の関心度合い</p> <table border="1"> <caption>問3 「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて」の関心度合い</caption> <thead> <tr> <th>関心度合い</th> <th>人数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大いに興味がある</td> <td>15</td> <td>60%</td> </tr> <tr> <td>関心がある</td> <td>9</td> <td>36%</td> </tr> <tr> <td>あまり興味がない</td> <td>1</td> <td>4%</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>25</td> <td>100%</td> </tr> </tbody> </table>	関心度合い	人数	割合	大いに興味がある	15	60%	関心がある	9	36%	あまり興味がない	1	4%	合計	25	100%	<p>ワークショップのテーマである「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて」への関心度合いは、「大いに興味がある」が60%、「関心がある」が36%と、大多数の回答者の関心が高かった。他方、「あまり興味がない」とする回答者が1名(4%)いた。</p>			
関心度合い	人数	割合																	
大いに興味がある	15	60%																	
関心がある	9	36%																	
あまり興味がない	1	4%																	
合計	25	100%																	

問4 本日のワークショップは役に立ったか



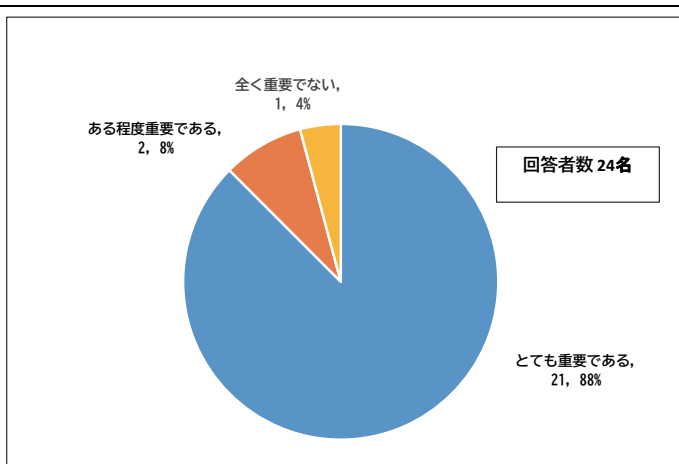
ワークショップが役に立ったかについては、「非常に役に立った」が60%、「役に立った」が36%と、大多数の回答者が肯定的な回答をしている。他方、「あまり役に立たなかった」とする回答者が1名(4%)いた。

問5 時間配分について



時間配分については、「適切であった」が92%であった。そのほか、「長かった」が4%、逆に「短かった」が4%、「その他」が4%であった。「その他」の回答は「短かった」との複数回答で、「発表者が少し早口で、時間が少し短かった」との意見を寄せている。

問6 「畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査事業」は重要と考えるか



「畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査事業」は重要と考えるかという問に対しては、「とても重要である」が88%、「ある程度重要である」が8%と、多数の回答者が肯定的な回答をしている。他方、「全く重要でない」とする回答が1名(4%)あった。

問7 (自由意見)

- ・アニマルウエルフェア(AW)の話題において AW は生産性の追求に内包されていることを消費者に知らせるべきだと思う。(床が悪ければ 35kg もとれない、エサが悪ければ良い肉はできない。
- ・一時的な給付、補てん、値下げで生産支援するのではなく、給食での国産牛使用や制度的価格転嫁に対し支援し、将来的な国内需要の強化に向けた取組や輸出を充実させて欲しい。
- ・国クラスターが使いにくいと福田種鶏場社長が言っていたが、全農系の協議会が採用されやすく、ひいては商系飼料メーカー協議会での採用が少ないように思う。商系メーカーも協力できることは、やれると思うので補助金助成について勉強会などワークショップのテーマにしてもらえればと考える。
- ・採卵鶏の発表がなかったため、次回は参加いただきたい。
- ・畜産経営とひとくちに言っても様々な業態があり、それぞれの生産者に目を向けたきめ細やかな支援が必要と感じた。
- ・畜産農家が自らの経営努力で吸収できる状況ではない異常事態だという認識が必要、本当に危ない状況。国は消費者の理解を得て、畜産物の価格転嫁を早急に進める必要がある。輸入に頼らない飼料生産対策に国は力を入れるべき。
- ・常日頃から経営に危機感を持って取り組み
- ・もっと畜産経営者の方々にも参加してもらえば良いと感じた。
- ・皆様の貴重な意見、考え方を県内農業者に伝えて行きたい。
- ・有意義なワークショップだった。

「アンケート調査」にご協力をお願いします



このアンケートは、全日畜が取組んでおります「畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査事業」のために活用させていただきます。本日の全日畜ワークショップ「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて（広島会場）」についてご感想等をお聞かせください。

問1 どちらからの参加ですか。以下のいずれかに「O」印を記入してください。

- (1) 畜産経営者 (2) 飼料メーカー (3) 畜産団体等 (4) 行政機関
- (5) 農業大学校等 (6) 施設機械メーカー
- (7) その他（具体的に： _____）

問2 問1で、(1)畜産経営者と回答した人にお聞きします。あなたの畜産経営の「畜種」は何ですか。以下のいずれかに「O」印を記入してください。（複数回答可）

1. 酪農
2. 肉用牛
3. 養豚
4. 養鶏（採卵鶏）
5. 養鶏（ブロイラー）
6. その他（具体的に： _____）

問3 本日のテーマ「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて」の「関心度合い」についてお聞きします。

1. 大いに関心がある
2. 関心がある
3. あまり関心がない
4. 全く関心がない
5. その他（具体的に： _____）

問4 本日のワークショップは役に立ちましたか。

1. 非常に役に立った
2. 役に立った
3. あまり役に立たなかった
4. 全く役に立たなかった
5. 分からない
6. その他（具体的に： _____）

裏面も記入をお願いします。

問5 ワークショップの時間配分等はいかがでしたか。（複数回答可）

1. 適切であった
2. 長かった
3. 短かった
4. 意見交換の時間が少なかった
5. その他（具体的に： _____）

問6 畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査事業（目的：畜産危機を克服し、経営を継続されておられる事例の中から経営継続のためのヒントを得るために、危機を克服している事例集を作成する）は、これからの畜産経営において重要とお考えですか。

1. とても重要である
2. ある程度重要である
3. あまり重要ではない
4. 全く重要ではない
5. 分からない

問7 本日のワークショップのテーマ「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて」について、ご意見を自由にお書きください。

（自由意見欄）

ご協力、ありがとうございました。

◎ 報道記事

日本農業新聞 2023年(令和5年)11月17日(金曜日)

(11)

中四国 **ワイド**

2023年(令和5年)11月17日(金曜日)

日本農業新聞

畜産危機克服へ事例共有 経営発展のヒント探る

全日本畜産
経営者協会

全日本畜産経営者協会は16日、飼料高騰や家畜伝染病など畜産経営の危機への対応をテーマにしたワークショップを広島市で開いた。食品残さを含めた未利用資源を活用した循環型農業の実践や経営の多角化など、畜産危機に対応した優良事例を共有し、持続的な経営発展に向けたヒントを探った。

鳥根県益田市の松永牧場は1983年の水害時に、自前で飼料の搬入道路と飲用水を確保した事例を報告。水害で農場が孤立したが、ブルドーザーで飼料の搬入道路を作り、地元消防団の協力で、消化用ポンプで飲用水を確保した。

近年の飼料高騰に対しては、食品製造時に発生するおからなど副産物を使ったエコフィードの給餌を含めた循環型農業を実践する。松永和平代表は「日頃から畜産危機を想定して、ゆとりのある経営を確立することが重要だ」と力を込めた。

広島市の久保アグリ

フームは、酪農に加え、生乳の加工販売など事業の多角化で経営を安定させる。農場内に直営のシェアードとチーズ製造施設を作り、年間約2トンを販売する。岡山市の福田種鶏場は、ふ卵場を新設し、業務を集約化した取り組みを発表した。同協会の鈴木一郎常務は「畜産危機に対する工夫を情報共有し、一丸で乗り越えていきたい」と話した。



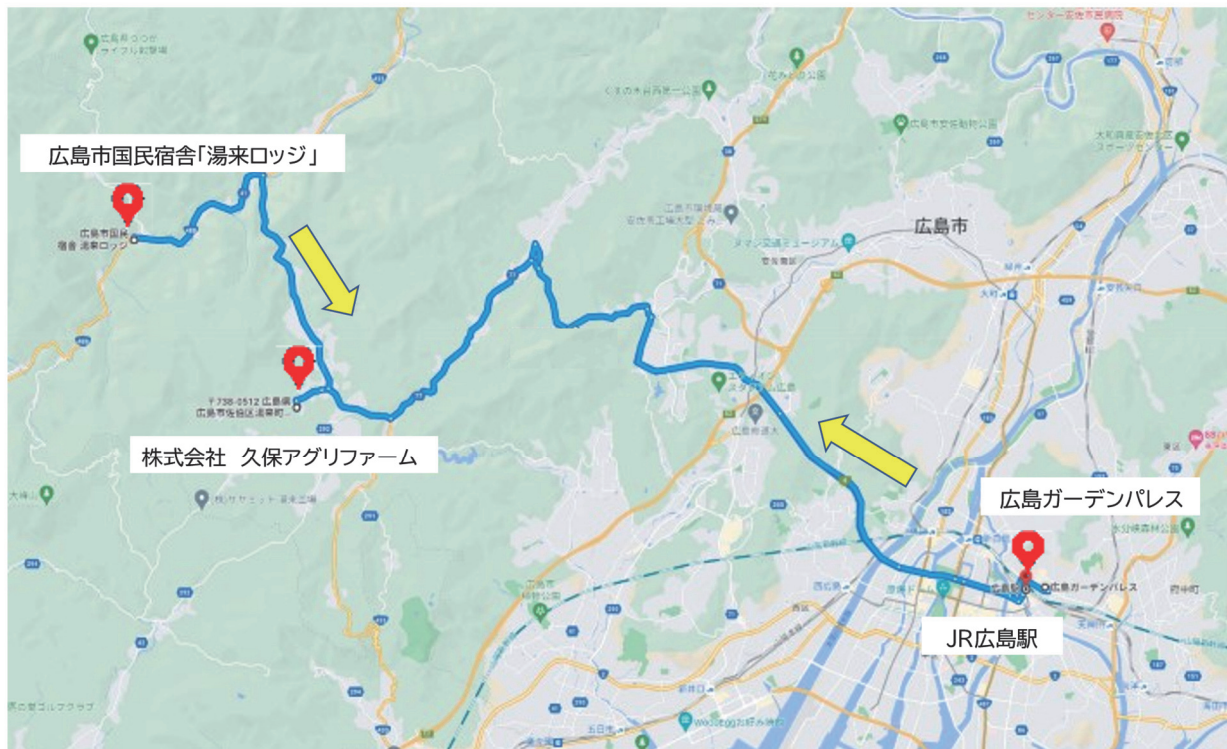
現地調査概要

1 株式会社久保アグリファーム現地調査の概要

日時：令和5年11月17日(金) 9:00～13:30
視察先：(株)久保アグリファーム
代表取締役 久保 正彦 氏
所在地：広島市佐伯区湯来町白砂11207-2
参加者：前日のワークショップ広島会場の参加者から9名
説明者：久保 正彦 氏

JRA危機克服事業 全日畜ワークショップ「広島会場」 現地調査行程図

令和5年11月17日



(1) 株式会社久保アグリファームの概要

1) 家畜飼養頭数と生産量

飼養頭数：乳牛 経産牛 70頭、育成・子牛 50頭 計 120頭

飼料基盤：草地 15ha (うち放牧地 2ha)

生乳生産量：550～600t/年

2) 沿革と経営の特徴

- ・広島市佐伯区の地に 1941 年に創始者の久保政夫氏が八丈島から乳牛 23 頭を連れて雑木とクマザサに覆われた砂谷村に帰郷して自ら開墾したのが農場の歴史が始まり。さらに、旧湯来町や周辺の農家に働きかけ、多くの酪農家を育成して、久保農場の隣接地に(株)砂谷乳業を起し、牛乳の製造販売に取り組んだ。
- ・消費者とのふれあいを強めるため、農場内に 2011 年農場直営のジェラート作りを始めた。当初、年間 100 名程度しか訪れなかった客が、現在 10 万人が訪れるようになった。現在は、都内でサラリーマン生活を送っていた 3 代目久保宏輔氏が 31 歳の時に後継者となって運営中。
- ・また、長男の久保尚彦が中心となり運営している砂谷乳業では、4 戸の酪農家と(株)久保アグリファームで搾った生乳を製品化。
- ・3 代目久保宏輔氏は、牧場をやるなら放牧酪農を目指したいと考え、牧場敷地の傾斜地を利用した放牧地作りに奮闘中。
- ・牛乳のほかに、新たに牧場内に「いちご園」を整備。いちごと牛乳は相性が良く、ジェラートの売り上げが少ないとき、イチゴ生産による多角化で経営の安定に結びつける事業を展開。
- ・国産飼料給与にこだわり、草をお乳に換える生産理念(土・草・牛)を継承し続ける事が美味しいジェラートの基本理念に、低温殺菌牛乳を牧場内にあるジェラート工房(アルトピアノ)で加工・販売している。
- ・15 ヘクタールの土地を有し、国産飼料給与をポリシーに、粗飼料自給率は 70%。乳牛に給与する牧草の 90%を自家生産でまかなっている。
- ・学校関係の課外授業にも協力して、牧場での搾乳体験、バター作りなどで食育教育にも取り組む。
- ・生乳販売では、宅配方式を中心に「地産地消」の事業にも取り組んでいる。
- ・広島市内から 1 時間内のところに位置し、景観もよく、子供たちの食育教育に最適な環境。

3) 労働力：常勤労働力 8 人、(農場管理 4 人、加工・販売部門 4 人)

4) 牧場の施設

- ・生産部門は、フリーバーン牛舎 1 棟、育成舎(パドック付き) 1 棟、たい肥舎 1 棟、農器具庫 1 棟
- ・草地は、採草地と放牧地に分けられている。放牧地を拡張し、放牧酪農を目指す。
- ・多角化部門は、ジェラートの工房「アルトピアノ」1 棟、シェアキッチン 1 棟、イチゴ生産ハウス 2 棟
- ・農機具は、大型トラクター 2 台、プラウ 1 台、ラッピングマシン 1 台、マニュアルスプレッダー 1 台、モアー 1 台、テッダー 1 台、鎮圧ローラー付き播種機 1 台、サブソイラ 1 台など

5) 経営危機の要因と経営への影響

- ・自然環境要因として、長雨による収穫適期の損失、播種後に圃場の水はけが悪く種子が腐る場所もあった。また、社会的要因としては、濃厚飼料の高騰、ぬれ仔価格暴落、エネルギーの高値、為替変動による円安。

- ・経営への影響は、①購入飼料の影響は著しく 1.4 倍近くも高騰し乳飼比 70%近くに跳ね上がった、②生産者乳価が昨年、今年と実施されたが、為替の影響も利益増の実感がない、③牧草の種子も 1.5 倍近く、肥料代 2 倍近く高騰し粗飼料生産コストも増加、そして、④仔牛の価格暴落 F1 の価格も以前は 10 万円前後で推移していたが、家畜商の手数料・市場手数料で赤字の状態などである。

6) 経営危機への対処

- ・経営危機への対処として、①自給飼料の増産、土壌分析の実施、土壌の硬盤をサブソイラによる心土破碎で透・排水性の改善より種子の根腐れ収量増加を図る、②放牧地の拡大 (1.5 ha) で育成牛の生産コストを削減、③イチゴ農園を併設し新たな収益を生み出す、及び④ジェラート店の周辺整備を実施、心地よい非日常空間の提供 (情緒的価値の創出)。

(2) 視察会場での説明・質疑のポイント

- ・放牧地の拡張で苦労したことは、土壌が真砂土で、土壌流亡、土砂崩れなど災害発生の懸念。
- ・採草地は、イタリアンライグラス、スーダングラスの輪かん作付け、播種面積は 10ha 程度。イタリアンライグラスはサイレージ調製。1 ロール 300 kg (直径 145cm) の重さがあり、水分 50%程度で中水分サイレージ調製。1 ha 当たりのロールバールしたサイレージは 27 ロール程度の収量であり、現物で 27 ロール×300 kg=8,100 kg程度。イタリアンは 2 倍体。4 倍体を撒きたいが、梅雨時の雨がありサイレージ調製が不可。スーダングラスは 2 回刈り可能。
- ・採草地の耕起は、プラウで 25~30 cm。135 馬力の大型トラクターを使う。
- ・トウモロコシの栽培は、イノシシ、サルなどの獣害で不可能。
- ・フリーバーン牛舎に敷くオガクズは、近傍の製材所から入手。15~16 万円/月の購入費がかかる。
- ・牧場から出るふん尿は、牧場内で完全還元。水田農家などへの搬出はない。牧場周辺の耕種農家とのたい肥還元、稲わら利用などの連携は、1 区画の水田面積が狭小で大型畜産機械が入らないので進まない。
- ・イチゴ栽培に取り組む。①品種は、紅ほっぺ、章姫、四星の 3 種、②苗は埼玉、広島から購入、③収穫は 1~2 月で、牧場で加工するアイスクリームなどに使う予定。
- ・イチゴ栽培を始めたのは、酪農経営とのコラボで、①将来はたい肥利用によるイチゴ栽培用の土づくり、及び②チーズ製造に使うバチリヌス菌はチーズホエーに含まれ、イチゴの表面につく病原菌を駆逐してくれるので相性がよいなど多角化のメリットに期待。
- ・チーズ製造技術習得は、長男の妻が山形の蔵王にある研修所で受講済み。



久保アグリファーム



牧草地が見える
ジェラート工房「アルト ピアーノ」



ジェラート工房「アルト ピアーノ」
外観



ジェラート工房「アルト ピアーノ」
店内



放牧地



真砂土の牧草地



イチゴハウス内

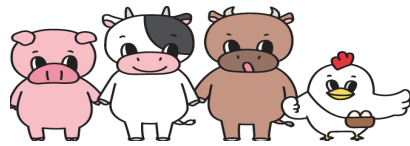


聞き取り調査
(久保ファーム3代目久保宏輔氏)



聞き取り調査





「全日畜」は畜種横断の畜産経営者の団体です



全日畜HP <http://www.alpa.or.jp>
全日畜HP <http://www.alpa.or.jp>
全日畜HP <http://www.alpa.or.jp>
全日畜HP <http://www.alpa.or.jp>